

資料・研究ノート

ビルマの「ダムマタツ」(慣習法典)について

奥平龍二\*

An Outline of the History of the Origin, Development  
and Research on the Dhammathats

—Customary Law Texts in the Kingdoms of Burma—

Ryuji OKUDAIRA\*

The aim of this paper is to outline the history of the origin and development of the Dhammathats, the collection of rules embodying the customs and usages of the Burmese people in the kingdoms of Burma, which are the main source of Burmese Law, and to trace briefly the research done on the

Dhammathats up to the present, since special efforts were made to print, edit and translate them from the palm leaf manuscripts and so on by both foreigners and Burmese between the end of the 18th Century and the end of the 19th Century.

まえがき

現代ビルマ社会の法制度と法思想の基盤をなしているものは、現代ビルマの代表的法学者であるウ・ミヤ・セインが指摘しており、<sup>1)</sup>ビルマ諸民族の歴史過程において、長い間採用、履行されてきた慣習を基礎とし、普及してきた社会法である「ビルマ慣習法」<sup>2)</sup>(မြန်မာ့ဓလေ့ထုံးတမ်းဥပဒေ Myanmar Dalay Htondan Upaday) であり、その中核は、一

般的に「ダムマタツ」(ビルマ語では ဓမ္မထာတ် Dhammathat, パーリ語では Dhammasattham) と呼ばれるものである。

「ダムマタツ」とは、1885年のティボオ(Thibaw)王流刑に伴うコンバウン王朝崩壊までのビルマ歴代王朝で、その時代に応じ、履行・遵守されてきた仏教徒ビルマ人の慣習、文化、社会規範ならびに発生した訴訟の判例を集め解説した社会法典であり、<sup>3)</sup>いわゆる「慣習法典」<sup>4)</sup>と称すべき法典の総称である。

\* 外務省アジア局南東アジア第2課; Second South East Asia Division, Asian Affairs Bureau, Ministry of Foreign Affairs, Tokyo, Japan

1) ဦးမြစ်နီ (U Mya Sein). 1970. မြန်မာ့ဓလေ့ထုံးတမ်းဥပဒေ (5th ed.). Rangoon, p. 1.

2) *Loc. cit.*

3) *Ibid.*, p. 3.

4) O. H. ムーサム『ビルマ仏教徒と慣習法』昭和17年、満鉄東亜経済調査局、p. 5.

この意味で、僧侶に関する法律であるヴィナヤ(Vinaya)<sup>5)</sup>とは区別されるべき性質のものである。

ダムマタツは、その源流をマヌ法典をはじめとするインド諸法典にさかのぼることができるといわれ、事実、初期のダムマタツにおいては、形式的にも、内容的にも、ヒンドゥー法典の影響を少なからず受けてきた形跡が認められる。しかし、時代の変遷とともに、土着の社会慣習にそぐわぬヒンドゥー法思想は、仏教思想の導入などとも相まって、漸次排除され、いく多の法典編纂を重ねて、内容的にも変質し、やがて典型的なビルマ法典ができあがった。このようにダムマタツの編纂は長い歴史過程を経てきたため、ダムマタツ相互の間で、あるいは一つのダムマタツの中ですら相異なるし前後不統一が見られる。しかし、各々のダムマタツにおいて、その時代の人々の慣習を考慮しつつ、補足修正が加えられてきた事実は、ダムマタツが時代の要請に応えた社会法典であったことを示している。

王朝時代においては、国  
現在でも高い  
存在価値  
王や法律家は、ダムマタツ  
を畏敬の念をもって取り扱  
った。裁判官は諸々のダムマタツを参照しながら、直面する係争を処理することが要求された。また、国王には法律を制定する権限はなく、従って、国王がダムマタツを編纂することは考えられないことであった。しかし、ダムマタツが唯一絶対的な法源であることは、逆に国王や法律家にダムマタツを批判させ、適宜必要な修正を行うことを可能にさせた。<sup>6)</sup>

だが、英国のビルマ併合後、英国法の導入に伴い、ビルマにも成文法の時代が到来し

た。ダムマタツはもはや唯一、絶対的な法源ではなくなった。裁判所は「ビルマのダムマタツは、それらの固有の力によって適用されるのではなく、制定された法によってのみ適用されうる」<sup>7)</sup>とした。また、王朝時代の判例の多くは、社会の実情にそぐわず、その存在価値を失ってしまった。独立後現代に至るビルマ社会では「ビルマの慣習法と政府の法規規定が相反する場合には、政府の法規規定に従うこと」<sup>8)</sup>すなわち「ダムマタツと成文法とが仮に抵触するような事態が起これば、成文法が優先する」<sup>9)</sup>のであり「現代の慣習の方があまり世間に知られていない慣習法典の規定よりも、はるかに安全な指導者である」<sup>10)</sup>とさえいわれる。しかし、それにもかかわらず、とくに、婚姻、離婚、養子、相続ならびに宗教的慣例などのいわゆる民事に関する判例の多くは、ダムマタツの規定が、依然として最終的な法源となっており、また、現代ビルマの著名な法学者ウ・フラ・アウンが指摘しているとおり、「ビルマ人は、慣習的法規が法的、立法的承認がなければ法たりえないとの理論を容認しておらず、慣習もまた、立法と同じような意味での法制定手続であると考えている」<sup>11)</sup>点から見ても、今日のビルマ社会においても、ダムマタツの存在価値は極めて高いといえよう。

なお、ダムマタツは、貝葉書 (၆၀၀၅ Peiza) や書帖 (၃၅၅၀ Parabaik) の形で編纂され、数々の異本が知られているが、19世紀中葉になって欧州人の手で初めて外国語に完訳、出版されたのを皮切りに、コンバウン王朝(1752-1885)後期にかけて、これらダムマタ

7) *Ibid.*, p. 38.

8) U Mya Sein, *op. cit.*, p. 13.

9) 大野 徹『ビルマの社会と経済』〔アジアを見る目43〕1972, アジア経済研究所, p. 74.

10) Mootham, O. H. 1939. *Burmese Buddhist Law*. London, p. 6.

11) U Hla Aung, *op. cit.*, p. 40.

5) *Ibid.*, p. 7. 「寺院法典」との訳が見られるが、ここでは「僧侶に関する法律」と訳しておきたい。

6) U Hla Aung. 1969. "The Burmese Concept of Law," *Journal of The Burma Research Society* (以下 *J. B. R. S.* と略す), Vol. LIII, pt. ii, p. 35.

ッ・テキストの刊行事業が、欧州人研究者が中心となって進められるにおよんで、ダムマタッの存在がにわかに脚光を浴び、その研究が鼓舞された。以後、英国統治下では、欧州人研究者が中心となって、また独立後、現代に至る時期においては、主としてビルマ人法律研究者の手で、ダムマタッの研究が続けられ

てきている。

本稿では、ビルマのダムマタッの起源、性格ならびにその成立過程、ダムマタッ諸本の構成と内容、さらに研究史などダムマタッの全貌を可能な限り明らかにしようとした。今後のわが国におけるダムマタッ研究の一助になれば、私の望外の喜びとするところである。

## I ダムマタッの起源および性格

### 1 起 源

ダムマタッがいつごろから、どんな種類のものが、いくつぐらい編纂されたかについて正確に把握することは、これまで明らかにされている諸資料からだけでは、極めて困難である。ウ・ミヤ・セインは「一つの民族ないし一つの国家が出現する際、その文化程度に従い、慣習、社会的義務、規則などが存在することは間違いない。同様にわれわれビルマ人が民族として明確になりはじめた時期においても、伝統的慣習、文化ならびに社会的義務などが存在したに違いない。そのような社会的義務ないし規則などに違反した場合、受けなければならない罰則の規定も存在したはずである。このような慣習、文化ならびに社会規範などを集成した時期に、われわれのダムマタッが初めて出現したものとおよそ推定される」<sup>12)</sup>と述べている。

ダムマタッの起源に関し、主として西欧人ならびにインド人研究者の多くは、これがサンスクリット語「ダルマシャーストラ」(Dharmaśāstra)を語源にもち、ヒンドゥー諸法典の影響を受けたものであるとの説を唱えてきた<sup>13)</sup>のに対し、ビルマ人研究者の多くは、語源的にはパーリ語の「ダムマサットン」(Dhammaśāttam)に由来し、また、「ダルマシャーストラ」がヒンドゥー教聖典である

のに対し、ダムマタッは、土着の慣習に基づいて編纂された社会慣習法典であるとして、ヒンドゥー起源説を否定し<sup>14)</sup>あるいは、ヒンドゥー法典の影響を受けたことを認めつつも、その後大きく変質した<sup>15)</sup>との説をとっている。かように、ダムマタッの起源をめぐる相対立する種々の学説が発表されてい

13) いくつかの例を挙げれば次のとおりである。

- ①「多くの節が古代ヒンドゥー諸法典から取り入れられている。また、ダムマタッは多くのヒンドゥー慣習を承認している。それ故、ダムマタッのヒンドゥー起源を否定することができない」(Lahiri. 1957. *Principle of Modern Burmese Buddhist Law* (6th ed.). Calcutta, p. 2.)
- ②「インド法は、ビルマ法の第1期の間、タライン人によって採用され、さらに、パーリ語タライン・テキストからの翻訳に際して、何らの重要な変更を行うことなくビルマ人により引き継がれた」(Furnivall, J. S. による Dr. Forchhammer 説の紹介。1940. “Manu in Burma,” *J.B.R.S.*, Vol. XXX, pt. ii, p. 353.)
- ③「ビルマの古代法および若干の相異はあるが、後代のパーリ語の法テキストは、マヌなどのヒンドゥー・ダルマシャーストラを基礎としている」(Mabel Haynes Bode. 1965. *The Pali Literature of Burma* [photographic Rept.]. Rangoon, p. 84.)
- ④「ヒンドゥーの影響は、ワーガル・ダムマタッにおいて、明白に識別しうる。ダムマタッという言葉そのものが、そのインド起源を自ら表わしている。それは、明らかにヒンドゥー・ダルマシャーストラの応用である。マヌは最終的な権威として頼りにされている」(Maung Ba Han. 1952. *A Legal History of India and Burma*. Rangoon, p. 71.)

12) U Mya Sein, *op. cit.*, p. 4.

興味深いが、これについて論ずることは、本稿の目的ではないので、別の機会に改めて検討してみたいと思う。

ダムマタツは、主として僧侶ならびに法律家の手で編纂されてきた。それらは、初期のところにはパーリ語ないしモン語で書かれたが、タールン (Tharlun) 王 (1629-1648) 治世以降、ビルマ語散文あるいは韻文で書かれるようになった。王朝時代にあつては、これらのダムマタツを参照しつつ、裁判の判決を下した。ビルマ史最古のダムマタツは、西暦紀元前5世紀のドウタツバウン (Duttabaung) 王治世に編纂された Duttabaung Min Dhammathat (ဒုတ္တဘေဝင်မင်းဓမ္မထာတ်) であり、2番目はシュリークシェートラ (ビルマ語読みで、タイエーケッターヤ) 国、アティティヤ (Atitya) 王治世に編纂された Atitya Dhammathat (အတိတိယာဓမ္မထာတ်), 3番目は、パガン国ピュー・ミン・ディー (Pyu Min hti) 王治世 (ビルマ暦89年) に編纂された Pyu

Min hti Dhammathat (ပျဲမင်းဓမ္မထာတ်) とされているが、<sup>16)</sup> これら三つのダムマタツは、いずれも現存せず、また、これらが実際に存在したとの確かな資料も見当たらないことから、伝説の域を出ないとの説<sup>17)</sup> もある。

## 2 性 格

前述したとおり、ダムマタツは、ビルマ人仏教徒の慣習、文化、社会的規範や判例をまとめた社会法典であるが、さらに厳密にいえば、ムーサム (O. H. Mootham) が指摘して

- 15) 若干の例を挙げれば次のとおりである。
- ① 「ヒンドゥー法に対するわれわれの借りには、少なからぬものがある。しかし、われわれの借りの程度はしばしば誇張されてきた」 (U Hla Aung, *op. cit.*, p. 31.)
  - ② 「ビルマ法は古代のタイプのヒンドゥー法に基づいているが、それは次第に仏教原理が作用して、その源から、かけ離れて行った」 (Tagore, *Jardine's Note*. Rangoon, pt. III, p. 2.)
  - ③ 「ビルマのダムマタツは、随所でインド起源であることを露呈している。……しかし、ヒンドゥー法論文 (Hindu treatises) がわれわれの裁判所で権威があるという印象を形成していることに対して学生諸君は警戒せねばならない」 (U Chan Toon. 1894. *The Principle of Buddhist Law*. Rangoon, p. 9.)
  - ④ 「ビルマ法は、その初期の段階では、かなりの程度ヒンドゥー・マヌ法典の影響を受けた。しかし、それはのちになってヒンドゥー法文献との関係を全て打ち破った。かつてダムマタツは、ヒンドゥー法典からの応用によって編纂されたが、再びインドから借用する必要がなくなった」 (U Hla Aung, *op. cit.*, p. 33.)
  - ⑤ Htin Aung 説に対する批判「『ビルマ法の起源は土着のものであり、ヒンドゥー法の影響は、ほとんど受けていない』と確信することは、われわれとしては恩知らず (Ungrateful) であり、あるいは熱狂的の愛国的ですらある。……『ビルマの慣習法は、チベット・ビルマ族がたずさえてきた』とする見解は信じ難い」 (Maung Kyin Swi, *op. cit.*, pp. 199-200.)

16) U Mya Sein, *op. cit.*, p. 8.

17) Maung Kyin Swi, *op. cit.*, p. 5.

14) いくつかの例を紹介すれば次のとおりである。

- ① 「これらすべての事実を考慮したのち、ビルマのダムマタツの起源は土着のものであり、また、その中に並べられた法律はほとんどビルマの慣習法であるとの結論に達する」 (Maung Kyin Swi. 1966. "The Origin and Development of the Dhammathats," *J.B.R.S.*, Rangoon, p. 204.)
- ② 「賢者マヌがビルマのテキストで解説しているのは、ヒンドゥー法ではなく、ビルマの法と慣習であり、マヌは便宜な、威信ある代弁者である」 (Maung Maung. 1963. *Law and Custom in Burma and the Burmese Family*. The Hague, p. 5.)
- ③ 「ビルマの慣習法は、ビルマ史とともに発生してきた。ビルマ民族はチベット・ビルマ族に属し、北部山岳地帯から平地へと降りて来た時から、彼らとともに慣習法もたずさえてきた」 (Maung Kyin Swi, *op. cit.*, p. 194 に Dr. Htin Aung 説が紹介されている。)
- ④ 「ビルマ法は、起源において土着のものであった。そして、ほとんどヒンドゥー法の影響は受けなかった」 (Htin Aung. 1962. [Preface to] *Burmese Law Tales*. London.)

いるとおり、法典 (code) あるいは法規類纂 (digest) というより、むしろ風俗・習慣、係争の論点に関する判決や従前の裁判で支持された判例などの記録である。<sup>18)</sup> また、ダムマタッは、僧侶の行為に関する準則や僧院関係の事件に関する規則の蒐集録であるヴィナヤ<sup>19)</sup> とは峻別されるべき性質のものである。すなわち、ビルマ人家族の慣習法は、一般的に「ビルマ人仏教徒法」(Burmese Buddhist Law မြန်မာ့ဗုဒ္ဓဘာသာတရားဥပဒေ) と呼ばれるが、それは実際には僧侶の法律 (ecclesiastical law) ではなく世俗法なのである。この点誤解を生み易いのでとくに注意しておく。<sup>20)</sup> 確かに「仏教徒法」という呼称は、Burma

Courts Act (1875年) Upper Burma Civil Justice Regulation (1886年) Lower Burma Courts Act (1889年) などで初めて用いられたが、この呼称は、宗教関係法と誤解されるので、表現としては適切ではなく、多くのビルマ人研究者がその表現の誤りを指摘している。<sup>21)</sup> とくに、ウ・ミヤ・セインは「ビルマ人の慣習の歴史を積み重ね、時代に即して修正し、受け容れてきたビルマ婚姻、社会などの関係法は『ビルマ人慣習法』(Myanma Dalay Htondan Upaday မြန်မာ့လေ့ထုံးတမ်းဥပဒေ) と表現して初めて適切かつ正確である」<sup>22)</sup> と述べている。

## II ダムマタッの成立過程

次に、上記 I の 1 で見たとおり、ビルマ最古のダムマタッが仮に前 5 世紀に成立していたとして、その後 19 世紀の末葉にかけてのビルマ王朝時代に一体どのような形態のダムマタッがいくつ編纂されたかについて見てみたい。

まず、ダムマタッに言及し、解説したビルマ語文献として主なものを挙げれば、時代順に①1796年に、ティリ・マハー・ゼーヤドゥー (Thiri Mahā Zeyathū) により編纂された Kawi Lakkhaṇa Dipani(ကဝိလက္ခဏဒီပနီ),<sup>23)</sup>

②1888年に、ミンヂー・マハー・ティリ・ゼーヤドゥー (Mingyi Mahā Thiri Zeyathū) により編纂された『ビルマ文献史』(Piṭakat Thōnboon Sadan ဝိဇ္ဇကတ်ပုံစာတမ်း と呼ばれる Piṭakat Daw Thamaing ဝိဇ္ဇကတ်တော်သမိုင်း)<sup>24),25)</sup> および ③1893-1895年に、キンウン・ミンヂー (Kinwun Mingyi U Gaung) が著わした『ビルマ人仏教徒法要録』2巻 (သုံးဆွဲခြောက်စောင်တွဲအဓမ္မမှုခန်းဓမ္မသတ်ကျမ်းကြီး) および သုံးဆွဲလေးစောင်တွဲအိမ်မှုခန်းဓမ္မသတ်

18) Mootham, *op. cit.*, pp. 3-4. 邦訳は満鉄経済調査局版による。

19) *Ibid.*, p. 5 において、Vinaya テキストとして、i) Prajikam, ii) Patittiya, iii) Mahabagga, iv) Collabagga, v) Pavivara の 5 種を挙げ、また、同註釈書として i) Aṭṭakathas, ii) Tikas, および iii) Gandhanharas の三つを挙げている。

20) Maung Maung, *op. cit.*, p. viii 参照。

21) U Mya Sein, *op. cit.*, pp. 1-2.  
M. T. Gywe. 1910. (A preface to) *A Treatise on Buddhist Law*. Vol. II, Mandalay, pp. iii-iv.  
Maung Maung, *op. cit.*, p. 13.

22) U Mya Sein, *op. cit.*, p. 3.

23) ဆရာကြီး ဦးဆန်းထွန်း တည်းဖြတ်သုတ်သင် (Sayagyi U Hsan Htun). 1965. “သိရိမဟာဇေယျသူ/ကဝိလက္ခဏဒီပနီ,” ကဝိလက္ခဏသုံးကျမ်းတွဲ (2nd ed.), Mandalay.

24) ဦးခင်စိုးအမှူး: ရှိသောပါဠိဆရာများ (U Khin Soe). 1959. ဝိဇ္ဇကတ်ပုံစာတမ်းခေတ်ဝိဇ္ဇကတ်တော်သမိုင်း. Rangoon.

25) ဝိဇ္ဇကတ်ပုံစာတမ်း 第 1 版が 1905 年にラングーの Thudhammawaddy Press から発行された。

ကျိး) 26) の三つである。

マハー・ティ  
リ・ゼーヤド  
ウーの貢献

①はいわば「綴字法辞典」  
と呼びうるものであるが、  
内容的には、三蔵経、星  
相学、ダムマタッなどに関し知っておくべ  
き内容が盛り込まれた一種の辞典であり、コ  
ンバウン王朝初期から今日までのビルマ文学  
研究者にとって手離せない文献となっている。<sup>27)</sup>この中で、ダムマタッについて若干の  
解説を行なっている。<sup>28)</sup>また②については、  
ミンドン王(1853-1878)からティボオ王(1878  
-1885)治世にかけて官吏として仕え、のちに  
マイン・カイン (Maing Khaing) 侯となっ  
たマハー・ティリ・ゼーヤドゥーが一時、王  
室図書館の司書 (Keeper) を務めていたこと  
があり、この機会が彼に本書を編纂させ、ダム  
マタッの調査研究に大きく貢献するところと  
なった。彼は同書において、仏陀が説いた経、  
律および論の三蔵パーリ聖典とともに、義  
疏 (Atthakatha), 復註 (Tika) をはじめ、星相  
学典、医薬典、四言長詩、韻詩、子守歌に至るま  
で、1886年までのありとあらゆる書帖 (Para-  
baik), 貝葉書 (Peihmu) を、その名称、編者、  
編纂年などが容易に理解できるよう、項目ご  
とに歴史的に配列し、各々に簡単な解説を付  
している。<sup>29)</sup>このうち、ダムマタッのリスト  
は、No. 1602 から No. 1704 までとなってお  
り、総計 175 のダムマタッ (但し、ここでい  
うダムマタッとは、広義の意味のダムマタッ  
と解され、ダムマタッ・テキストそのもの以  
外に、裁判記録、ダムマタッ概説書、ダムマ

26) 英訳の正式呼称は *A Digest of the Burmese Buddhist Law concerning Inheritance and Marriage; being a Collection of Texts from Thirty-six Dhammathats* (Vol. I Inheritance, Vol. II Marriage).

27) Saya Gyi U Hsan Htun, *op. cit.*, Preface, pp. 2-3.

28) *Ibid.*, pp. 59-60.

29) U Khin Soe, *op. cit.*, နိဒါန်း (၁).

タッ韻詩をも含んでいる) が存在したことを  
明らかにし、そのうち判明しているもの 102  
について、解説を行う一方、残りの73につい  
ては、名称、編者など一切不明であるとして  
いる。<sup>30)</sup>さらに③については、コンバウン王  
朝末期のミンドンおよびティボオ両王の首  
席大臣を務め、政治家として、また、枢密院  
(Hluttaw) および最高法廷のメンバーとして  
法典に通暁していたキンウン・ミンダーが、  
上ビルマの法務長官バージェス (G. D. Burgess)  
の求めにより、著わしたもので、同書は1897  
年にバージェスにより英訳されている。<sup>31)</sup>本要  
録 (Digest) は、婚姻および離婚に関し、過  
去36のダムマタッの写本を照合ならびに校正  
したものであるが、この中で36のダムマタッ  
を成立年代順に配列し、<sup>32)</sup>前記②の Pitakat  
Daw Thamaing の記述をも参考にしながら、  
各々のダムマタッの概要説明を行なっている。

ジャーディン  
とフォーシャ  
ー マ ー

次に、ダムマタッの成立過  
程に関する研究の先駆者と  
して活躍した外国人学者  
は、1882年および1883年に下ビルマの法務  
長官で判事であったジョン・ジャーディン  
(Sir John Jardine) に協力し、1885年に  
Jardine Prize を受賞したドイツ人考古学者  
で、ラングーン・カレッジのパーリ語教授フ

30) (1) *Ibid.*, pp. 230-246.

(2) ဦးအောင်သန်းထွန်း (U Aung Than Htun). 1968. မြန်မာမင်းများတရားစီရင်ရေး. Rangoon, pp. 175-178.

31) (1) *Translation of A Digest of the Burmese Buddhist Law concerning Inheritance and Marriage; being a Collection of Texts from Thirty-six Dhammathats* (Vol. I Inheritance, Vol. II Marriage).

(2) U Mya Sein, *op. cit.*, p. 11. G. D. Burgess による英訳について言及している。

32) Mootham, *op. cit.*, Appendix II; Maung Maung, *op. cit.*, Appendix I; U Aung Than Htun, *op. cit.*, pp. 179-183 などにも表示されている。

フォーシャーマー (Dr. Forchhammer) であったが、彼はその著 *The Jardine Prize: An Essay*<sup>33)</sup>の中で、ダムマタツの成立過程を三つの時代に区分している。すなわち、第1期 (11-16世紀) については、西暦10世紀より以前に南インドからインドシナ半島の西海岸のインド植民地にもたらされたインド法がタライン族により受容され、さらにタライン化されたインド法がパーリ語・モン語韻文からの翻訳などにより何らの重要な変更も加えられることなく、<sup>34)</sup>ビルマ人にもたらされたが、この期に属するものとして *Dhammavilasa*, *Wagaru*, *Ko-zaung-kyop* など約20にのぼるダムマタツを挙げている。<sup>35)</sup>第2期 (16-18世紀前半) については、第1期のインド法が後退し、土着の慣習やビルマのマヌ (*Manuraja* や *Kaing-za* など) が取って替わり、また仏教と新バラモン (*Neo Brahmatic*) 的要素が導入されたとしているが、この期については、*Maharaja Dhammathat* など僅か三つのダムマタツに言及しているだけである。<sup>36)</sup>第3期 (18世紀中葉-19世紀後半) については、第1期および第2期の諸々の法典の内容が統合され、またその時代の人々の間に存在した諸々の法律や慣習が記録されている点や仏教的要素が支配的になった点などを指摘しているが、この期に属するものとして *Manu Kyay* など30におよぶダムマタツに言及している。<sup>37)</sup>

以上のようなフォーシャーマーのダムマタツの成立過程に関する分類ないし見解に対して、ビルマ政府経済企画顧問として長らくビルマに滞在したファーニヴァル (*J. S. Furnivall*) も、この分類を採用しているが、<sup>38)</sup>他方で「フォーシャーマーが活躍した時代は、仏教についても、あるいは熱帯極東 (*Tropical Far East*) の歴史についても、ほとんど何も知られていない時代であったため、多くの点でフォーシャーマーの所説が再検討を要するとしても何ら不思議ではない」<sup>39)</sup>と述べている。ファーニヴァルはさらに上記ビルマ人諸学者の代表的研究をも参照しつつ、フォーシャーマー説の再検討の必要性を説いた。<sup>40)</sup>ファーニヴァルは、*Piṭakat Daw Thamaing* をもとにして、ラングーンの *Bernard Free Library* で追跡調査した結果判明した18のダムマタツを加え、ビルマのダムマタツの時代区分、種類および編纂された数を表示した<sup>41)</sup>が、それをさらに整理すれば表1のとおりとなる。そして、ファーニヴァルはビルマ人研究者のダムマタツに関する文献を参照し、フォーシャーマー説に検討を加えた結果として、表2のような結論を出している。

なお、ビルマ国内の少数民族の慣習法典については、例えば、アラカン族の書いたダムマタツがなお現存している<sup>42)</sup>ことが知られているが、これらについては別の機会に取り上げたいと思う。

33) (1) Dr. Forchhammer. 1885. "On the Sources and development of Burmese Law from the era of the first introduction of the Indian Law to the time of British occupation of Pegu with Text and Translation," *The Jardine Prize: An Essay*, pp. 106-107.

(2) U Aung Than Htun, *op. cit.*, pp. 183-185.

34) Forchhammer, *op. cit.*, p. 74.

35) (1) Forchhammer, *op. cit.*, pp. 106-107.

(2) Furnivall, *op. cit.*, p. 353.

36) Forchhammer, *op. cit.*, p. 107.

37) *Loc. cit.*

38) Furnivall, *op. cit.*, pp. 353-370.

39) *Ibid.*, p. 351.

40) Forchhammer 説に批判を加えたものとして、Maung Kyin Swi, *op. cit.*, pp. 189-193 などがあ

41) Furnivall, *op. cit.*, p. 352.

42) E. マウン著、伊藤正己、鈴木喜久江訳、宮崎孝治郎編「ビルマ婚姻・離婚法」『新比較婚姻法Ⅷ—東南アジア(4)』1976、東京、pp. 9-10.

表 1

	ダムマタツの種類	Thamaing で言及されているもの			追跡調査の結果 判明したもの
		総数	リストアップされているもの	不明のもの	
1.	ダムマタツ・テキスト (Dhammathat ဝဗ္ဗသတ်)	57	46	11	14
2.	裁判記録(判例集) (Phyathtoon ဖြတ်ထုံး)	82	34	48	1
3.	ダムマタツ概説書 (Khwè-bon ခွဲပုံ)	10	6	4	0
4.	ダムマタツ韻詩 (Linka လင်္ကာ)	26	16	10	3
		175	102	73	18

表 2

	時期	ダムマタツ	
		フォーシャーマーによるリストアップの数	ファーニヴァルによるリストアップ
第1期	バインナウン帝国の崩壊まで (-1600)	約20	1. ပြူမင်းထီး 2. ဝဗ္ဗဝိလာသ 3. ဝါဂရူ (ဝါရရ) 4. မနုလင်္ကာ 5. ပါသဒဝဗ္ဗသတ် 6. ပြူမင်း (မုန်တိုပြန်၊ ဝေဠိပြူစု) 7. ဝါဂရူ (ရှင်ဗုဒ္ဓဆောသမြန်မာဘာသာပြန်) 8. ဝဗ္ဗသတ်ကျော် 9. ကိုးစောင်ချုပ်
第2期	タラインによる アヴァ侵攻まで (1600-1750)	3	1. မဟာပညာကျော်ဖြတ်ထုံး 2. ကိုင်းစားမနုဖြတ်ထုံး 3. မနုသာရရွှေမျဉ်းဝဗ္ဗသတ်
第3期	アラウンパヤ王朝 (1752-1885)	32	1. မနုကျယ် 2. ဝဗ္ဗဝိနိစ္ဆယ 3. ကန်တော်ပကိဏ္ဍကလင်္ကာ 4. မနုသာရဝဗ္ဗသတ်ကျမ်းသစ် 5. တေဇောသာရရွှေမျဉ်း 6. မနုဝဏ္ဏနာလင်္ကာ 7. မနုရင်းလင်္ကာ 8. ဝိနိစ္ဆယပကာသနီ 9. မနုဝဏ္ဏနာ 10. မောဟဝိဇ္ဇေဒနီ 11. ဆုံးတာမနု 12. ဝိနိစ္ဆယပကာသနီလင်္ကာ 13. ဝိနိစ္ဆယရာသီ 14. အသုသံဓေပဝဏ္ဏနာ



### Ⅲ ダムマタツ諸本の構成および内容

#### 1 構成

前項で見たとおり、19世紀末葉のビルマ王朝崩壊の時期に至るまで、数々のダムマタツが編纂されてきたが、その構成上、すべてのダムマタツに共通している点は、まず、仏陀を崇敬する文言ではじまり、ついで Rishi Manu が宇宙の果ての壁に到達して、ダムマタツを発見し、公布するためにそれを Mahasammatha に捧げるといふ物語で構成される序論が続くことである。この序論は、法の淵源に関する一つの重要な説明であり、また、ダムマタツ文学で理解されているとおり、法の本質を例証するものでもある。Dhammavilasa のような若干のダムマタツにおいては、序論は極めて精巧であり、法は発見されるもの、与えられるものであって、作られるものではないということを実証してみせる。その淵源は絶対的かつ不変のものであり、法は一つの絶対的な倫理としての資格が与えられている。ダムマタツ・テキスト編者の職務は、それ故、解説者のそれである。すべてのダムマタツに当てはまることは、法の絶対性ということがその様式の特徴となっていることである。<sup>43)</sup>

序論について、法の諸規則の18項目の分類の説明が行われる。初期のダムマタツの場合には、ビルマの条件に適合させつつ、ヒンドゥー諸法典(Hindu Dharmaśāstra など)の条項をかなり借用した形跡が認められる。<sup>44)</sup> 例えばヒ

ンドゥー・マヌ法典の影響を強く受けたとされる Dhammavilasa Dhammathat ではその編者、Shin Dhammavilasa はヒンドゥーの法律の部類(divisions)を借用して、それを18のカテゴリーに分類した。しかし、その際、ビルマに明白に適合するよう若干の修正を加えている点が注目される。<sup>45)</sup> この18の分類とは、1)負債、2)動産の寄託、3)所有者の同意なく動産の外観を変更すること、4)贈与の留保、5)事業の協力、6)労働および職業サービスに対する報酬、7)責任と約束の不履行、8)家畜、荷車および小舟の所有者と借人、9)売買、10)土地の境界、11)偽りの告訴、悪意の起訴および中傷、12)窃盗および強盗、13)襲撃(財産の損傷および破壊を含む)、14)殺人、15)夫婦(彼らの義務および権利、結婚および離婚)、16)奴隷、17)相続、18)とばく<sup>46)</sup>となっている。また、現存最古の Wagaru Dhammathat においては、1)負債契約、2)婚姻における授受、3)離婚、4)姦通、5)贈与、6)相続、7)売買、8)財産の管理、9)財産の担保、10)財産の分与、11)とばく、12)雇用、13)2足および4足動物(鳥獣)、14)奴隷、15)暴行、16)中傷と偽りの告訴、17)土地の配分と境界、18)窃盗<sup>47)</sup>の18分類からなっている。しかし、Kaingza Shwe Myin, Manussika, Manosara, Dhammathat Kungya, Manu Reng, Kyetyo などのダムマタツにおいては、18に分類しながら、ヒンドゥー・マヌ法典には従っていない。<sup>48)</sup> さらに1756年に Kyum:wun Bhumma Jeya (Kyum:wun

43) Hooker, M. B. 1978. "The Indian-Derived Law Texts of Southeast Asia," *The Journal of Asian Studies*, Vol. XXXVII, No. 2, pp. 201-202. 本論文は同著者が最近著わした *A Concise Legal History of South-East Asia*. 1978. Oxford, pp. 17-25 に収録されている。

44) U E Maung. 1951. "Insolvency Jurisdiction in Early Burmese Law," *J.B.R.S.*, Rangoon, p. 2.

45) Itin Aung, *op. cit.*, pp. 11-12.

46) *Ibid.*, pp. 12-13. 邦訳に当たっては、田辺繁子訳『マヌ法典』昭和29年、岩波文庫、東京を参照した。

47) မနုဗ္ဗသတ္တဝါတို့၏မနုဗ္ဗသတ်ကျမ်း. 1892. *King Wagaru's Manu Dhammasattham Text, Translation and Notes*, Rangoon.

48) Hooker, *op. cit.*, p. 202.

Bhumma Jeya Mahā Thiri Uttama Jeya Thingyan Amat) が編纂したとされる Manu Kyay Dhammathat は、ダムマタツ史上、最も傑出したものといわれるが、<sup>49)</sup> もはや18項目の形式にはとらわれず、全体を14の部門に分類し、不動産、動産、債戸・債権人、租借、窃盗、殺害、婚姻、姦通、離婚、離婚に際しての財産分与、養子、養女、遺産相続、遺産分与、給与、仏塔、僧院および僧侶に関する法などをはじめ種々の内容が網羅されており、奴隷制度、売買による奴隷制度、多妻制度などについても詳述されている。<sup>50)</sup> 従って、これは実際には、法典でもなければ法規類纂でもなく、むしろ、現在の風俗や習慣ならびに以前のダムマタツにおいて保存されていた判例の記録であるが、<sup>51)</sup> さらに、ビルマの著名な文学者、ウ・ペイ・マウン・ティンはその著『ビルマ文学史』においてマナーヂェ・ダムマタツが「法律の世界のみならず、ビルマ文学の世界においても、著名な文献の一つであり、ビルマ諸王時代の行政、文化などを明らかにした里程碑の一つである」<sup>52)</sup> と述べているが、これが「百科全書的性質」<sup>53)</sup> を持つものといわれるゆえんである。かように Manu Kyay Dhammathat は「五つの大河と500の小川が海に注ぐがごとく、大小様々のダムマタツが、Kyum:wun Gyi の Manu Kyay Dhammathat に吸収されたため、この

一つの法典を見れば、他の大小の法典の由来をまとめて知ることができる」<sup>54)</sup> とさえいわれるのである。分量的にも初期のダムマタツに比し、かなり大部のものになっている。また、Gandi などいくつかのダムマタツになると、上記18の項目については、何ら言及しておらず、テキスト自体にはインド法の枠組の影響が、はっきり認められるものの、インドのモデルからは、かなりかけ離れてしまっている。<sup>55)</sup>

## 2 内 容

既に見たとおり、ダムマタツは、ビルマ王朝時代の数世紀間にわたり、何種類も、しかも相互に相当の時間を隔てて編纂され、加えて貝葉書や書帖の保存年数がせいぜい1-2世紀程度と考えられることから、いくたびとなく筆写を繰り返してきたため、各種の異本を生む結果となった。他方、この間、慣習自体が変化したことが考えられ、行為の準則も漸次修正され、あるものは、法の規定となり、また、あるものは消滅し、さらに内容的にも各々のダムマタツ相互において、相反するものの、<sup>56)</sup> 一つのダムマタツの中でも前後不一致なもの<sup>57)</sup> が少なからず見出されることになった。そのため内容上の諸変化をテキストが編纂された時期のビルマにおける状況の変化と関連づけることの重要性が指摘されているのである。<sup>58)</sup>

ダムマタツに見られる判例の多くは、現代ビルマ社会の実情にそぐわなくなっている。

49) မြန်မာနိုင်ငံတော်သမ္မတမြန်မာနိုင်ငံတော်. 1955.

မြန်မာ့စွယ်စုံကျမ်း. Vol. II, Rangoon, p. 112.

50) U Mya Sein, *op. cit.*, p. 10.

51) Forchhammer, *op. cit.*, p. 96.

52) ဦးပေမောင်တင်. (U Pe Maung Tin). 1965.

မြန်မာ့စွယ်စုံကျမ်း. pp. 239-241; မြန်မာ့စွယ်စုံကျမ်း. Vol. 8, pp. 425-426 参照.

53) (1) G.E. ハーヴィ著, 五十嵐智昭訳『ビルマ史』(略本)(第2版) 昭和20年, 東京, p. 169.

(2) レイ・タン・コイ著, 石沢良昭訳『東南アジア史』1970, 東京, p. 87.

54) (1) မြန်မာ့စွယ်စုံကျမ်း. Vol. 8, p. 426.

(2) U Pe Maung Tin, *op. cit.*, p. 240.

55) Hooker, *op. cit.*, p. 202.

56) *Ibid.*, p. 202.

57) 例えば「(夫は) 妻を多く娶ることができると規定していながら、他方で妻に対し、彼女の意思により夫のもとから去って行く権利も与えられており、去ってのち1年経つと離婚の権利が生ずる」(U Mya Sein, *op. cit.*, pp. 12-13.)

58) Hooker, *op. cit.*, p. 202.

例えば、ダムマタッには、奴隷制や多妻制について詳述されているが、<sup>59)</sup>これらは現代の法とは相反している。したがって、ダムマタッの判例の多くは、現代社会とは相容れない。しかし他方、そのあるものについては、現代ビルマの慣習法ときほど相異がない<sup>60),61)</sup>ことに注目すべきであり、とくに遺産、相続、婚姻、離婚などいわゆる民事に関する内容に

ついては、今日でも法判決の最終的な拠り所として、その存在価値が高い。結局、現代ビルマの慣習法に関する論拠としている基本的諸点は、1) ダムマタッ、2) ビルマ人仏教徒の現代慣習、および、3) 高等裁判所、最高裁判所および民事裁判所などの判例の三つである。<sup>62)</sup>

#### IV ダムマタッの研究史

##### 1 テキストの刊行および翻訳

ダムマタッが西欧人に初めて紹介されたのは、古くは18世紀末葉の西欧人のビルマ沿岸への接近の時代にさかのぼることができよう。<sup>63)</sup>すなわち、1795年、アヴァ宮廷への英国最初の外交使節としてサイムズ (Major Michael Symes) がビルマを訪問したが、サイムズはビルマのダムマタッとヒンドゥー・マヌ法典の類似点に注目した。<sup>64)</sup>サイムズは、1783年から1806年までアヴァおよびラングーンに滞在していた<sup>65)</sup>イタリア人初期キリス

ト教宣教師の一人であったサンジェルマノ (Father Sangermano) に会ったが、サンジェルマノよりビルマ法典のラテン語への部分訳を得た結果、そのヒンドゥー・マヌ法典(彼はそのペルシャ語版を所蔵していた)との類似性に打たれた。<sup>66)</sup>このことについてジャーディンはサイムズとサンジェルマノが研究に入り議論を重ねていくうちに、サイムズがアラカン法典のペルシャ語版とインドのマヌ・シャーストラのビルマ語訳の類似性に気付いたというのが事実のようであると指摘している。<sup>67)</sup>サイムズについて、翌年の1796年、もう一人の英国使節ヒラム・コックス (Captain Hiram Cox) が駐在官としてビルマに着任した。彼は着任の前年、いく人かのアルメニア人に、ウィリアム・ジョーンズ (Sir William Jones) の Institute of Manu のビルマ語訳をさせていたが、コックスは、ビルマの諸々のダムマタッがマヌ法典を既に内包している以上、無駄な作業であったと述べている。<sup>68)</sup>同じく英国使節の一人クロフォード (Crawford) も、ビルマのダムマタッがヒンドゥー法に由来している点に留意している。<sup>69)</sup>しかし、ビルマのダムマタッの存在が一躍脚光を浴びることになったのは、1847年、英国人リチャー

59) 「両親には、息子や娘を身売りすることさえ出来る権力があり、また、夫は自分の妻を殴打するばかりか、売り飛ばすことさえできる権限がある」(U Mya Sein, *op. cit.*, p. 13.)。同様の内容が、大野徹, *op. cit.*, p. 74 にも述べられている。

60) 例えば「女性を各々の夫の遺産相続者として一様に承認しており、また、妻が夫を放棄する権利および追い出す権利、離婚の権利などの権利が多く与えられている」(U Mya Sein, *op. cit.*, p. 13.)。

61) *Attasankhepa Vannana Kyam*: において「他人の妻と姦通した男は、その妻が我慢できない場合には、必要に応じ離婚できる」との規定を掲げている (*Loc. cit.*)。

62) U Mya Sein, *op. cit.*, p. 16.

63) Sangermano, Father. 1966. *The Burmese Empire* (5th ed.). London, pp. XXV-XXVI および pp. 221-223.

64) Maung Kyin Swi, *op. cit.*, p. 173.

65) Sangermano, *op. cit.*, p. XXIV.

66) Maung Kyin Swi, *op. cit.*, p. 173.

67) Sangermano, *op. cit.*, p. XXV および p. 221.

68) Maung Kyin Swi, *op. cit.*, p. 173.

69) Sangermano, *op. cit.*, p. 221.

ドソン博士 (Dr. Richardson) が, Manu Kyay Dhammathat を貝葉書から印刷・翻訳<sup>70)</sup> したことはじまるといえよう。以来, 種々のダムマタッを貝葉書などを底本として印刷刊行する努力がなされる一方, これらダムマタッの刊行物が法廷で用いられることとなった。ついで1852年には, インド省 (Indian Office) のロスト博士 (Dr. R. Rost) が, ビルマのダムマタッの一つを西欧人学者に紹介し, ヒンドゥー法との類似性を指摘した。<sup>71)</sup> さらにスパークス (Major Sparks) は, 1860年にビルマ人の法律が効力を有する訴訟において, 英国人裁判官のガイダンスとして, 短い法典の形でダムマタッと既存の慣習から集めた『基本法規概要』を出版し,<sup>72)</sup> これらのダムマタッをマヌ諸法のビルマ語訳書<sup>73)</sup> と呼んだ。この法典はリッター (H. M. Litter) なる人物により註釈が付された。その数年後, 仏教徒法の諸問題に活発な関心を抱いたサンドフォード (Sandford) 元法務長官の要請で, Manu Vaṅṅana, Manusāra Shwe Myin, Manu Reng, Vinicchaya Pakāsanī などいくつかの重要なダムマタッが, 当時のペギー管区弁務官であったホーレイス・ブラウン (Col. Horace Brawne) の監督のもと, ウ・テッ・トオ (U Thetto) 副郡長により編集された。ダムマタッに対する彼なりの評価を示した一連の判決に対しては, サンドフォードに負うところが大きい。<sup>74)</sup> しかし, ダムマタッが大きく脚光を浴び, それまであまり活用されていなかった諸々のダムマタッが役

立てられるようになったのは, 19世紀末葉, 下ビルマの法務長官をしていたジャーディンの時代以降である。ダムマタッの多くのテキストが貝葉書から次々と印刷のうえ, 刊行され, 漸次, この分野の学問の穴が埋められていくことになった。

## 2 テキスト研究の刊行史

ダムマタッの諸々のテキストの研究の奨励に努力したのは, 前に触れたジャーディンである。彼はダムマタッのヒンドゥー起源を見極め, その類似性と相異点を確認し解説するという非常に新しく, 興味深い, 極めて困難な分野の研究を鼓舞した。<sup>75)</sup> Vaṅṅana, Manusāra Shwe Myin, Manu Reng, Vinicchaya Pakathani などのダムマタッ・テキストを消化し, その研究の奨励に努めた。ジャーディンが初期のダムマタッがパーリ語で書かれていることから, パーリ語に造詣の深いフォーシャーマー博士の助力を得て, 初期のビルマ法文献に接近を試みたことは既に述べたとおりである。彼は, またダムマタッのヒンドゥー起源を見極めようとした最初の人物でもあった。彼は, ダムマタッに関する本質的な情報を引き出すために, 英語で書かれることを条件として「インド法の最初の導入の時代からペギーの英国支配の時代に至るビルマ法の起源と発展に関する」一つのエッセイに対し, 1,000 ルピーという当時としては多額の賞金を与えることとしたが, これが Jardine Prize Essay と呼ばれるものである。<sup>76)</sup> この賞金は結局, フォーシャーマーに贈られることとなった。この懸賞論文の主題

70) *The Dhammathat or The Law of Menoo*. Translated by D. Richardson (4th ed.). 1896. Rangoon.

71) Chan Toon, *op. cit.*, pp. 1-2.

72) (1) Forchhammer. *The Jardine Prize: An Essay*. p. 2.

(2) Maung Kyin Swi, *op. cit.*, p. 173.

73) Maung Kyin Swi, *op. cit.*, p. 173.

74) Chan Toon, *op. cit.*, p. 2.

75) (1) M. T. Gywe. 1919. *A Conflict of Authority in Buddhist Law*. Vol. I, Mandalay, p. XXVI.

(2) Chan Toon, *op. cit.*, p. 3.

76) (1) *Loc. cit.*

(2) M. T. Gywe, *op. cit.*, Introduction および p. XXVI 参照。

は、ビルマの歴史のみならず、文学、法律およびパーリ語ならびに姉妹語たるサンスクリット語に至る綿密な知識を必要とするもので、極めて困難なものであった。これらの資質がフォーシャーマーに備わっていたということになる。ジャーディンの主な業績は、彼の著 *Notes on Buddhist Law*<sup>77)</sup> (小冊子全8冊) である。当時仏教徒法なるものが混沌として、曖昧で定着していなかったため、<sup>78)</sup> これらすべてが裁判所への重要な指針となり、また、枢密院 (Privy Council) 議員により、ビルマ法の主要な権威として認められたが「とりわけ、婚姻と離婚の法に関しての完璧な宝庫 (Store House) であり、傑出した権威である」<sup>79)</sup> といわれた。この *Notes* の中で、ジャーディンは、ダムマタツ相互間の相反する部分を調和させる努力を行い、具体的に翻訳し、代表的トピックスにはコメントを付した。

他方、ジャーディンを助けてビルマ法の歴史研究の草分けとなったフォーシャーマーの業績については、ファーニヴァルをして「タライン人およびビルマ人によって過去5世紀の間に編纂された法典にこれほどの光が投げかけられたのは初めてである。この最初の試みが一つの見事な手腕によりなされたことをわれわれは告白しなければならない。ビルマとヒンドゥーのダムマタツの類似性が可能な限り明白に確立された」<sup>80)</sup> といわせている。

その後のダムマタツに関する研究は、主と

してジャーディンやフォーシャーマーの理論を基礎として展開されてきたといっても過言ではない。ジャーディンやフォーシャーマーと同時代には Rev. Dr. A. Fuehrer がいる。彼は1882年に *Manusāra Dhammathat* に関する論文を *Royal Asiatic Society* のボンベイ支部ジャーナルに発表した<sup>81)</sup> が、その中でビルマの *Manusāra* とヒンドゥー *Manudharmaśāstra* の間の興味深い類似性を指摘しつつ<sup>82)</sup> ダムマタツのヒンドゥー起源説を提唱した。さらにダムマタツの編者がヒンドゥー・マヌ法典のみならず、*Yajñavalkya*, *Narada*, *Brihaspati* および *Katyayana* などの法典を使用したことに言及、<sup>83)</sup> 同様の見解がサンスクリット語学者ジュリアス・ジョリイ (*Julius Jolly*) 教授によっても示されている。<sup>84)</sup> また、ほぼ同時代には、ウ・チャン・トゥーン (*U Chan Toon*)<sup>85)</sup> ウ・メイ・オウン (*U May Oung*)<sup>86)</sup> ウ・タ・ジュエ (*U Tha Gywe*)<sup>87)</sup> さらにやや時代が下って、1900年代

77) *Jardine. 1882-83. Notes on Buddhist Law by The Judicial Commissioner British Burma, Vol. I-VIII. (Vol. I, Marriage; Vol. II, Marriage; Vol. III, Marriage; Vol. IV, Marriage and Divorce; Vol. V, Inheritance and Partition; Vol. VI, Inheritance and Partition; Vol. VII, Inheritance and Partition; Vol. VIII, Marriage and Divorce)*

78) *M. T. Gywe, op. cit., Introduction* および p. XXVI.

79) *Ibid.*, p. XXIV.

80) *Chan Toon, op. cit.*, p. 4.

81) *Rev. Dr. A. Fuehrer. 1883. "Manusaradhammasattham, the only one existing Buddhist law book, compared with the Brahmanical Manavadharmasatram," Journal Bombay Branch of the Royal Asiatic Society, Vol. XV, p. 371.*

82) *Forchhammer. The Jardine Prize: An Essay.* p. 2.

83) *Maung Kyin Swi, op. cit.*, p. 174.

84) (1) *J. Jolly. 1885. "Outline of an History of Hindu Law of Partition, Inheritance and Adoption," Tagore Law Lecture, Calcutta.*  
(2) *Maung Kyin Swi, op. cit.*, p. 175.

85) *Chan Toon. 1894. The Principle of Buddhist Law.* Rangoon.

86) *U May Oung. 1914. A Selection of Leading Cases on Buddhist Law with Dissertations.* Rangoon.

87) (1) *M. T. Gywe. 1910. A Treatise on Buddhist Law.* Vol. II, Mandalay.

(2) *M. T. Gywe. A Conflict of Authority in Buddhist Law.* Vol. I (1919), Vol. II (1920), Mandalay.

前半には、ラヒリ (S. C. Lahiri)<sup>88)</sup> ウ・エイ・マウン (U E Maung)<sup>89)</sup> およびムーサム (O. H. Mootham)<sup>90)</sup> などラングーン高等裁判所弁護士が各々、ビルマ仏教徒法に関する著書を出版している。このほか、ラングーン大学法学部教授アーサー・エッガー (Arthur Eggar) がインドおよびビルマの法律に関する著書を刊行している。<sup>91)</sup> 1940年には既述のとおり、フォーニヴァルが“Manu in Burma”と題する論文を発表し、ダムマタツに関する研究が「(フォーシャーマー)以降何もなされていない。フォーシャーマーは、いまなお近代科学的批判の光を当ててビルマの法文献学の調査を試みた唯一人の学者として存在する」<sup>92)</sup>と述べ、フォーシャーマーの業績を認めている。さらに「彼の見解が“Pali Literature of Burma”におけるボード (M. Bode) の研究および“History of Burma”におけるハーベイ (G. E. Harvey) に受け容れられ、一つの大きなサークルへ達した」<sup>93)</sup> 意義を認め、他方でフォーシャーマーの理論に対し批判的再検討を加え「誰かビルマ人学者が(ダムマタツ) テキストの批判的再検討をいまこそ行うべき時である。そのような再検討は、単にビルマにおける法律の歴史のみならず、その社会の歴史を明らかにすることに役立つであろう」<sup>94)</sup>と述べている。

戦後のダム  
マタツ研究

戦後におけるダムマタツ  
の研究についてはフランス  
の碩学レンガ(R. Lingat)

が1949年に行なったビルマとタイのダムマタツに関する講演を挙げるができる。<sup>95)</sup> レンガ博士はビルマのダムマタツが宗教的支持を得た完全な民事あるいは世俗法典であるとした。<sup>96)</sup> また、1950年、ラングーン大学の学長であったティン・アウン博士 (Dr. Hting Aung) は同大学法学部の学生に対して行なった講義の中で、ビルマ法のインド起源というオーソドックスな理論を批判し、学生のみならず、ビルマ法およびビルマ史の多くの学者に大きな衝撃を与えた。この説はビルマ人法律家ウ・エイ・マウン (当時最高裁判事) が1951年に行なった一連の講義<sup>97)</sup> によって支持された。ティン・アウンは「今日、もちろん、私の理論は、一般的に受け容れられ、もはや異端者的、かつこじつけのものとは考えられなくなった」<sup>98)</sup>と述べている。他方、ウ・エイ・マウンは1937年の著書にその後の研究を加味して、新たに *Burmese Buddhist Law* を著わした。<sup>99)</sup> 既述のとおり、1955年に ငါးစုံဝိသုဒ္ဓိဝိသုဒ္ဓိဝိသုဒ္ဓိဝိသုဒ္ဓိ (Burmese Buddhist Law) を著わしたウ・ミヤ・セインはその第4版でこの表題の不適切に気付き、ウ・タ・ジュエ、ウ・メイ・オウン、エイ・マウン博士、マウン・マウン博士をはじめとする法学者もまたそれぞれの著書において同様のことを指摘しているとして、これを ငါးစုံဝိသုဒ္ဓိဝိသုဒ္ဓိဝိသုဒ္ဓိ (Burmese Customary

88) Lahiri. 1957. *Principles of Modern Burmese Buddhist Law*. Calcutta.  
89) U E Maung. 1937. *Burmese Buddhist Law*. Rangoon.  
90) Mootham. 1939. *Burmese Buddhist Law*. London.  
91) Arthur Eggar. 1929. *The Laws of India and Burma*. Calcutta.  
92) Furnivall. 1940. "Manu in Burma: Some Burmese Dhammathats," *J.B.R.S.*, Rangoon.  
93) Furnivall, *op. cit.*, p. 351.  
94) *Ibid.*, p. 370.

95) これは、R. Lingat. 1950. "Evolution of the Conception of Law in Burma and Siam," *Journal of the Siam Society*, Vol. 38, pt. 1, Rangoon, pp. 4-31 として収録されている。  
96) Lingat, *op. cit.*, p. 14.  
U Hla Aung, *op. cit.*, p. 33 でも触れられている。  
97) E Maung. 1951. *The Expansion of Burmese Law* (being A Series of Lecture Delivered). Rangoon.  
98) Htin Aung, *op. cit.*, Preface.  
99) E Maung. 1970. (Preface to) *Burmese Buddhist Law*. Rangoon.

Law) と改名している。<sup>100)</sup> マウン・マウン博士(Dr. Maung Maung)は、かつて最高裁判所長官を務め、現ネ・ウィン政権部内きっての法学者でかつ国家評議会メンバーとして代表的政治家の一人でもある。同博士はビルマに関する多くの著書、論文の中で、ビルマの法律と慣習を扱っている。<sup>101)</sup> このほか、ウ・フラ・アウン(U Hla Aung)<sup>102)</sup> マウン・チン・スウィ(Maung Kyin Swi)<sup>103)</sup> などラングーン文科大学法学部教授やウ・アウン・タン・トゥン(U Aung Than Tun)<sup>104)</sup> ウ・チェイン・アウン(U Thein Aung)<sup>105)</sup> ウ・ミエン・アウン(U Myint Aung) ウ・タン・アウン(U Than Aung) など最高裁判所弁護士などの法学者もまた、ダムマタツないし慣習法を扱った著書や論文を発表している。なお、歴史学者やパーリ語学者などの中にも、ダムマタツに触れた論文を若干発表している人がいる。<sup>106)</sup>

### 3 現代ビルマにおける研究

現代におけるダムマタツに関するビルマ内外での研究は、英国統治下におけるそれに比較すれば、成文法の時代を反映してか全般的に低調であるといえよう。しかし、外国人による研究が極めて低調である反面、ビルマ人による研究は、大学法学部や裁判所関係者を中心に漸進しているといえよう。

100) U Mya Sein, *op. cit.*, p. ii および同 Dr. Maung Maung による序文。

101) Maung Maung. 1963. *Law and Custom in Burma and the Burmese Family*. The Hague.

102) U Hla Aung. 1966. "Code Versus Custom in the Development of Burmese Law," *J.B.R.S.*, Rangoon.

103) Maung Kyin Swi. 1965. *The Judicial System in the Kingdom of Burma*.

104) Aung Than Tun. 1961. "The Burmese Customary Law," *The Guardian*.

105) ဦးသိမ်းအောင်. 1975. ဥပဒေရေးရာအဖြာဖြာ.

既に述べたとおり、ダム  
いまも生き  
る慣習法典  
マタツは、19世紀末葉に至  
る王朝時代のビルマ社会に  
あつては唯一絶対の典拠であつたが、今日では次第に現代的社会慣習や判例などにとって替わられつつある。<sup>107)</sup>しかし、今日でも「裁判所は、訴訟事件の裁判を拒絶するわけにはいかないし、現在の慣習が、その解決に対して何らの手引ともならない場合には、やはり古来の慣習法典に依拠せねばならない」<sup>108)</sup>のである。すなわちウ・フラ・アウンが述べているとおり「現代では、時代に合ったダムマタツに含まれていた規則のほとんどが最高裁判所で英国人およびビルマ人裁判官によって行われたいく百の判決の中に見出される。これらの法規によって、ダムマタツの黄金時代は終り、Case Law の時代がビルマにも明けたように思われる。しかし、裁判所による最近の裁判では、いまなおビルマの慣習法の諸問題を扱ううえで、ダムマタツが折に触れ参照されている」<sup>109)</sup>のである。ことに婚姻、

106) 例えば

(1) ဒေါက်တာသန်းထွန်း. 1960. "မြန်မာပြည်အုပ်ချုပ်ရေး အေဒီ၁၀၀၀မှ၁၉၀၀ထိ," ယဉ်ကျေးမှုစာစောင်အတွဲ၃၊ အမှတ်(၆), Rangoon.

(1) -do-, 1960. "ပုဂံခေတ်တရားဥပဒေ," ပြည်ထောင်စုယဉ်ကျေးမှုစာစောင်အတွဲ၄ အမှတ် ၂, Rangoon.

(3) ကျော်ဝင်း. 1969. "ယံသာဝတီဆင်ဖြူများရှင် (ဘုရင့်နောင်) လက်ထက်တရားစီရင်ရေး," Rangoon.

(4) သိန်းလှိုင်. 1970-1971. "ညောင်ရမ်းခေတ်တရားစီရင်ရေး," ဝိဇ္ဇာနှင့်သိပ္ပံတက္ကသိုလ်မဂ္ဂဇင်း, pp. 265-268.

107) 大野 徹, 『前掲書』p. 74.

108) Mootham, *op. cit.*, p. 7. 邦訳は満鉄東亜経済調査局刊によつた。

109) Hla Aung, *op. cit.*, pp. 35-36.

離婚、相続、分与などのいわゆる家族法に関しては、ダムマタッは依然として最終的な法の拠り所として、裁判所の判決においても大いに活用されている。婚姻法を中心にこれら家族法に関する論文が種々発表されているのもこうした事情の反映であろう。<sup>110)</sup>

1962年3月成立した現ネ・ウィン政権は、12年間におよぶ軍政時代に終止符を打ち、74年3月、民政移管にふみ切り「ビルマ連邦社会主義共和国憲法」のもとに法治国家として、ビルマ式社会主義社会の建設を目指して再出発した。ビルマは「ビルマ式社会主義」実践のため、人民に対し上からの指導によるイデオロギー教育の徹底と愛国心の高揚に努めている。従って現在のビルマにおける法学研究も当然のことながら「ビルマ式社会主義」路線に沿ったものといっても過言ではない。すなわち、現代ビルマにおける法学研究は、現代ビルマの政治体制を抜きにしては語れないのである。そこで最後にこのような政治体制下にあるビルマにおいて、ビルマの法制史ならびに法思想史に重要な役割を果たしてきたダムマタッに対するビルマ人研究者の関心の所在について触れておきたい。

現代ビルマにおけるダムマタッに関する研究者の関心ないし研究の特徴は次の3項目、すなわち 1) ダムマタッのインド起源説とそれに対する批判、2) ダムマタッを中心とするビルマの伝統的慣習法重視の姿勢、ならびに 3) 慣習法は法であるとの立場に分類することができる。

1)については既に述べたとおり、古くはジ

110) 例えば

- (1) Thaug Blackmore. 1961. "Old-Style Marriage in Modern Burma," *Eastern Horizon Monthly Review*, Vol. 1, No. 10, pp. 26-29.
- (2) U Tin. "Marriage Customs of the Burmese Upper Classes," *J.B.R.S.*, Vol. XII, pt. III, pp. 133-139.

ャーディンやフォーシャーマーの時代以来、主として欧州人やインド人研究者がダムマタッのインド起源説を提唱してきたのに対し、大方のビルマ人研究者は「ダムマタッは、ヒンドゥー・ダルマシャーストラからのものではなく、ビルマの慣習をもとに、ビルマ人学者によって編纂された」<sup>111)</sup>と主張している。2)については「人民による法治あるいは人民司法行政システムを確立すべく努力している現在、われわれは、われわれビルマの法システムを形成している道德原理を見失ってはならない。……ビルマ人は裁判所に行くことが嫌いであり、争いごとは和解や仲裁で解決することを好む」<sup>112)</sup>という法学者ウ・アウン・タン・トゥンの考え方の中に集約されている。さらに、3)については「慣習は本来の意味において法ではなく、純然たる道德である。慣習は、それが裁判所によりそのまま採用されたり、またそれに基づいて作られた法的決定が国権によって利用される時（初めて）純然たる法に変質せしめられる」<sup>113)</sup>とするジョン・オースティン (John Austin) の見解に対し、「慣習は、それが裁判所によって実施されるまでは、法でないとする考え方は、法過程における肝要な問題を曖昧にする。そのような考え方は、人類学者たちによっても否定されている」<sup>114)</sup>としてオースティン説を批判している。また、ウ・フラ・アウンは Vienna 学派の創始者ケルゼン (Hans Kelsen) の「慣習法の規則と成文法の規則との間には、何ら

111) 1974年4月、ラングーン文理科大学で行われた研究討論会 (Research Congress) でのビルマ慣習法に関するシンポジウムで法学者 Dr. U E Maung が発表したもので、その席上、U Than Aung および U Mya Sein の二人の法学者が U E Maung の説を支持している。

112) Aung Than Tun. 1972. "Moral Principles in Burmese Law," *The Guardian*, August 7th.

113) Hla Aung, *op. cit.*, p. 38.

114) *Loc. cit.*



の差異もない」との説を引用し「慣習は、それが法である証明を受ける以前に法であった。それは、慣習が立法と同じ意味において法創作手続であるからである」<sup>115)</sup>と述べ、さらにケルゼンの「慣習と成文法との本当の相異は、前者が非中央集権的であるのに対し、後者が中央集権的法創作である事実」に存する。慣習

法は、その目的のために設けられた特別の機関によって創られた法に従い、個人により創作されたものである」との立場を支持し、従って「一つの立法府が慣習を法として承認することの問題は起こらない」<sup>116)</sup>と結論づけている。

### お わ り に

現代は成文法の時代であり、もはや英国統治時代のダムマタッ研究に対する情熱や関心は薄れ、全般的にビルマ内外における研究そのものがやや低調な感じがしないでもない。しかし、ビルマ史(あるいは時にビルマ文学)研究にとって、ダムマタッは、現代においても極めて貴重な資料であり、ことに法制史ならびに法思想史の両側面からの研究が一層深められることが望まれる。幸い最近、アジアの慣習法に対する関心がわが国を含め、各国で高まりつつあることは喜ばしい。この見地から、拙稿がわが国におけるビルマのダムマ

タッ研究を促進するうえで一助となれば幸いである。ただ筆者自身、本研究に取り組んで日が浅く、また資料の極端な不足のために、ごく初歩的な解説の域を出なかったことは残念であるが、今後一層の研鑽を積んで行きたい所存である。

なお、末筆ながら、本稿を執筆するに当たり、不断の激励と懇切な御指導をいただいた京都大学東南アジア研究センター石井米雄教授ならびに資料の収集に協力を惜しまれなかった在ラングーン東京外国語大学アジア・アフリカ言語・文化研究所藪司郎講師、在ラングーン日本国大使館伊原浩一書記官およびビルマ人関係各位に深甚なる謝意を表したい。

115) *Loc. cit.*

116) *Loc. cit.*

### 参 考 文 献 (\*印は未見)

I. ダムマタッ・テキストの刊行物および英訳  
*The Dhammathat or The Law of Menoo.*  
 Translated from Burmese by D. Richardson.  
 1847 (1st ed.), 1896 (4th ed.). Rangoon.  
 (*Manugye Dhammathat* のビルマ語刊行本および英訳)  
 မနုကျယ်ဓမ္မသတ်. 1903. Rangoon.  
 (*Manugye Dhammathat* のビルマ語刊行本)  
 ကိုင်းစားမနုရာဇာ. 1870. ကိုင်းစားမနုရာဇာဓမ္မသတ် (ခေၵ်) မဟာရာဇသတ်ကြီး. Rangoon.  
 (Kaingza Manuyaza 著, *Kaingza Manuyayazathat* と呼ばれる *Mahayazathat Kyi* ビルマ語

刊行本)  
 ကိုင်းစားမနုရာဇာဓမ္မသတ်. 1900. မဟာရာဇသတ်ကြီး. Rangoon.  
 ( 同 上 )  
 မောင်တက်တူတည်းဖြတ်သည့်မနုရင်းဓမ္မသတ်. 1900. Rangoon.  
 (Maung Thettoo 編, *Manuyin Dhammathat*)  
 \*ဝဏ္ဏဓမ္မကျော်ထင်ရေး မောင်တက်တူတည်းဖြတ်သည့်. 1878. မနုဝဏ္ဏနာဓမ္မသတ်. Rangoon.  
 (Vañṇana Dhamma Kyaw Htin 著, Maung Thettoo 編, *Manuvañṇanā Dhammathat*. 1898

に Horace Brown 大佐により刊行)

\* ဝတ္ထုမွေကျော်ထင်ရေးမောင်တက်တူတည်း ဖြတ်သည်။ မနုသာရရွှေမျဉ်းမွေသတ်။ (同上著, 編による *Manusāra Shwe Myin Dhammathat* 刊行本。U Chan Toon 著, *The Principles of Buddhist Law*. 1894. Rangoon に重要部分収録)

ဝတ္ထုမွေကျော်ထင်ရေးမောင်တက်တူတည်း ဖြတ်သည်။ 1879. ဝိနိစ္ဆယပကာသနီမွေသတ်။ Rangoon. (同上著, 編による *Winita Pakatani Dhammathat* の刊行本)

\* *Buddhist law being a collection of portions of several Dhammathats (Text in English)*. 1891. Rangoon.

*King Wagaru's Manu Dhammasattham Text. Translation & Notes*. 1892. Rangoon.

မနုဓမ္မသတ္တိခေဏ်မနုဓမ္မသတ်ကျမ်း။ 1934. Rangoon. (同上。Text, Translation and Notes. 1963年に再版されている)

သမ္မဟုဒ္ဓိဝိစ္ဆယဒနီမွေသတ်ချုပ် (ခေဏ်) မြန်မာတရားလမ်းမွေသတ်ချုပ်။ 1892. Rangoon. (W. D. C. Ireland 編, *ビルマ語刊行本*)

\* ကင်းဝန်မင်းကြီးဦးကောင်း။ 1899. သုံးဆွဲခြောက်စောင်တွဲမွေသတ်ကြီး ၂တွဲ။ Rangoon. (キンウン・ミンヂー編, 36のダムマタツ 2 卷)

*Translation of A Digest of the Burmese Buddhist Law concerning inheritance and Marriage; being a Collection of Texts from Thirty-six Dhammathats by U Gaung, Ex-Kinwun Mingyi*. 1902 (Vol. I, Inheritance), 1909 (Vol. II, Marriage). Rangoon. (上記キンウン・ミンヂーの 36 のダムマタツの英訳)

ကင်းဝန်မင်းကြီးဦးကောင်း။ 1899. အိမ်မှုခန်းမွေသတ်ကျမ်းကြီး ၃၄-စောင်တွဲ။ Rangoon. (キンウン・ミンヂー編, 34 のダムマタツ)

ကင်းဝန်မင်းကြီးဦးကောင်း။ 1899. အဥသံဓေဝဝတ္ထုနာကျမ်း။ Rangoon. (キンウン・ミンヂー著, *Attasankhepa Vanna-na Dhammathat* *ビルマ語原文*)

ကင်းဝန်မင်းကြီးဦးကောင်း။ 1963. အဥသံဓေဝဝတ္ထုနာကျမ်း။ Rangoon.

(上記と同じ内容のもの。ビルマ語刊行本および英訳)

မနုဝတ္ထုနာအမွေခန်းမွေသတ်အတိုကောက်။ 1921. Mandalay. (*Manuvannānaamwekan Dhammathat* の概要書)

II. *ピヤットン* (ဖြတ်ထုံး: *Phyattoon* 裁判記録)

ရန္တမိတ်ကျော်ထင်။ 1965. ရေစကြိုခုံတော်ဖြတ်ထုံး။ Rangoon. (Yanta meik kyaw din. *Yesago Kondaw Phyattoon* の刊行本)

သုဓမ္မစာရီဖြတ်ထုံး။ 1962. Rangoon. (*Thudhammasari Phyattoon* の刊行本)

III. 判例集 (Rulings)

Upper Burma Rulings (1892-1922)	Lower Burma Rulings (1901-22)
1892-1896 (Vol. I & II)	*Vol. I-Vol. IV (1901-08)
1897-1901 (Vol. I & II)	Vol. V (1909-10)
1902-1903 (Vol. I & II)	Vol. VI (1911-12)
1904-1906 (Vol. I & II)	Vol. VII (1913-14)
1907-1909 (Vol. I & II)	Vol. VIII (1915-16)
*1910-1913	Vol. IX (1917-18)
1914-1916	Vol. X (1919-20)
1921-1922	Vol. XI (1921-22)

အထက်မြန်မာနိုင်ငံစီရင်ထုံးများအောက်မြန်မာနိုင်ငံစီရင်ထုံးများ။ (上記のビルマ語訳。Translation of the *Upper & Lower Burma Rulings*)

James Hla Kyaw. 1894. *Translation of Civil & Criminal Rulings*.

IV. 判決集 (Judgements)

*Selected Judgements and Rulings, Lower Burma (1872-1892)*. 1907. Rangoon.

*Printed Judgements (1893-1900)*.

V. 法規要録 (Digest)

Herbert Francis Dunkley. 1928. *A Digest of Burma Rulings 1872-1922*. Rangoon.

-do-, 1923-1937. 1941. Rangoon.

\*-do-, 1937-1941. Rangoon.

S. S. Hal Kar. 1928. *A digest of Civil Rulings of Burma including cases reported in all official & non-official reports, 1872 to 1927* (3rd ed.). Madras.

\*-do-, 1909. *Digest of the civil cases of Burma*.

\*-do-, 1910. *Digest of Rulings of Burma.*

\*-do-, 1913. *Digest of the privy council Rulings, 1811-1913.*

U Po Tha. 1960. *Digest of Burma Rulings (Civil & Criminal) 1937-1955.* Rangoon.

Arthur Eggar. 1962. *Digest of the Government of Burma Act.* Rangoon.

V. 法律レポート，年報，ジャーナルおよびマニュアルほか

1. Law Reports

*Indian Law Reports* (Rangoon Series). Vol. I (1923), Vol. II (1924), Vol. III (1925), Vol. IV (1926), Vol. V (1927), Vol. VI (1928), Vol. VII (1929), Vol. VIII (1930), Vol. IX (1931), Vol. X (1932), Vol. XI (1933), Vol. XII (1934), Vol. XIII (1935), Vol. XIV (1936), Vol. XV (1937).

\**Agabegls Burma Law Reports.* Vol. I-Vol. XIV (1895-1908).

*Rangoon Law Reports.* 1937, 1938, 1939, 1940, 1941, 1942, 1943, 1944, 1945, 1946, 1947.

2. Law Times

*Burma Law Times.* 1907-1920. Vol. I-XIII.

3. Law Journals

*Burma Law Journals.* 1921-1927.

4. Manual

*The Burma Courts Manual.* n. d.

*The Lower Burma Courts Manual.* 1907.

VII. 研究書および論文 (主としてビルマのダムマタッを扱ったものに限定した)

1. 邦文

O. H. ムーサム 昭和17年『ビルマ仏教徒と慣習法』満鉄東亜経済調査局。

田辺繁子訳 昭和29年『マヌ法典』岩波文庫，東京。

大野 徹 1964 「ビルマ語文献解題」『アジア・アフリカ文献調査報告書』第75冊 (言語・宗教 10)，アジア・アフリカ文献調査委員会。

—1972 『ビルマの社会と経済』〔アジアを見る目43〕アジア経済研究所。

—1972 「コンバウン時代のビルマの判例」『東南アジア—歴史と文化』2，東南アジア史学会。

大阪外国語大学ビルマ語研究室編 1968 「ビルマ研究資料 (6) —ビルマの慣習法と成文法」『ビルマ研究』V。

E・マウン著，伊藤正己，鈴木喜久江訳，宮崎孝治

郎編 1976 「ビルマ婚姻・離婚法」『新比較婚姻法Ⅷ—東南アジア (4)』東京。

2. ビルマ文

စာပေဗိမာန်. 1955. မြန်မာ့စွယ်စုံကျမ်းအတွဲ. Rangoon, p. 112.

-do-, 1963. မြန်မာ့စွယ်စုံကျမ်းအတွဲဝ. pp. 425-426.  
(サーペイペイマン発行，ビルマ百科全書，マヌヂェ・ダムマタッおよび同編者の解説)

ယူရိယသထင်းစာတိုက်လိမိထက်. 1925. ဗုဒ္ဓဘာသာဓမ္မသတ်ဥပဒေလက်သုံး. Rangoon.  
(仏教徒のダムマタッ・ハンドブック)

ဦးကျော်. 1922. လက်စွဲဥပဒေတန်းခွန်. Rangoon.  
(ウー・チョウ著，『法律ハンドブック』)

ဂျမ်းလှကျော်. 1903. ဓမ္မသတ်မေးခွန်းပုစ္ဆာအဖြေနှင့်တရားဌာနချုပ်ဝန်ကြီးနှင့်စပါယ်ရှယ်လွှတ်တော်ဖြတ်ထုံးနှစ်စောင်တွဲ. Rangoon.  
(ダムマタッ関係問題および解答集など)

မိုလ်ဗကို. 1952-1953. “မနုကျယ်,” ရန်ကုန်တက္ကသိုလ်ဥပဒေအသင်းနှစ်လည်စာစောင်, Rangoon.  
(ラングーン大学法学会年報。ボ・パー・コー寄稿。マヌヂェ・ダムマタッに関するもの)

မောင်ထွန်းမြိုင်. 1925. မြန်မာဗုဒ္ဓဘာသာဥပဒေ. Rangoon.  
(Maung Htun Myaing 著，『ビルマ仏教徒法』)

ဦးအေးမောင်. 1956-1957. “ဂုဏ်ယူထိုက်သောရှေးမြန်မာဥပဒေများ,” ရန်ကုန်တက္ကသိုလ်ဥပဒေအသင်းနှစ်လည်စာစောင်, Rangoon, pp. 20-31.  
(ラングーン大学法学会年報掲載，ウ・エイ・マウンの寄稿)

ဦးမြဝိန်. 1966. မြန်မာဗုဒ္ဓဘာသာတရားဥပဒေ (3rd ed.). Rangoon.  
(ウ・ミヤ・セイン著，『ビルマ仏教徒法』)

-do-, 1970. မြန်မာဓလေ့ထုံးတမ်းဥပဒေ (5th ed.).  
(同上書を改訂したビルマ慣習法)

မင်းကြီးမဟာသီရိဇေယျသူ. 1905. ပိဋကတ်ဂုဏ်စာထမ်း. Rangoon.  
(4人のビルマ人学者によって刊行された。マ

- ハー・ティリ・ゼーヤドゥー編, *Piṭakat Thōn-boon Sadan*)
- မင်းကြီးမဟာသိရိဇေယျသူ. 1956. ပိဋကတ်ဂု-ပုံစာတမ်း. Rangoon.  
(マハー・ティリ・ゼーヤドゥー編, *Piṭakat Thōnboon Sadan* と呼ばれるビルマ文献史書)
- ဦးဖေမောင်တင်. 1965. မြန်မာစာပေသမိုင်း. pp. 239-241.  
(ウ・ペイ・マウン・ティン著, ビルマ文学史, マスヂェ・ダムマタツの解説)
- U Tha Tin. 1921. *Buddhist Law*.
- ဦးအောင်သန်းထွန်း. 1968. လူထိုင်းအဖို့တရားဥပဒေ.  
(ウ・アウン・タン・トゥン著『みんなのための法律書』)
- do-, 1968. မြန်မာမင်းများတရားစီရင်ရေး.  
(ビルマ諸王時代の法律に関する解説書)
- do-, 1968. “မြန်မာဓမ္မသတ်များ၏အနှစ်သာရ,” မြန်မာနိုင်ငံသုတေသနဆွေးနွေးပွဲစာတန်းများအကျဉ်း, p. 116.  
(ビルマ研究討論会発表論文要旨集収録の「ビルマのダムマタツの本質」と題する論文要旨)
- ဦးဆန်းထွန်း. 1965. “ကဝိလက္ခဏဒီပနီ,” ကဝိလက္ခဏသုံးကျမ်းတွဲ, Rangoon.  
(ウ・サン・トゥン編, ティリ・マハー・ゼーヤドゥー著の一種の文献史書 *Kawi Lakkhana Dipani*)
- ဦးသာထင်. 1921. ဗုဒ္ဓဘာသာဓမ္မသတ်တရား. Rangoon.
- ဒေါက်တာသန်းထွန်း. 1960. “မြန်မာပြည်အုပ်ချုပ်ရေးအေဒီ၁၀၀၀မှ၁၃၀၀ထိ,” ယဉ်ကျေးမှုစာစောင်, Vol. III, pt. 6, Rangoon.  
(タン・トゥン博士の論文, 1000-1300のビルマの行政を扱ったもの)
- do-, 1963. “ပုဂံခေတ်တရားဥပဒေ,” ပြည်ထောင်စုယဉ်ကျေးမှုစာစောင်, Vol. IV. pt. ii, Rangoon.  
(同上論文「パガン時代の法律」)
- မောင်ခန့်. 1961-1962. “မြန်မာရှေးဟောင်းဓမ္မသတ်များ,” ရန်ကုန်တက္ကသိုလ်ဥပဒေအသင်းနှစ်ပတ်လည်စာစောင်, pt. i, Rangoon, pp. 24-26.
- (ラングーン大学法学会年報掲載, マウン・ダヌ著「ビルマの古代ダムマタツ」)
- ဦးဘဆွေ. 1927. မြန်မာတရားဓမ္မသတ်. Prome.
- အက်စ်စီလာဟိရိ. 1925. ဦးပွဲကမြန်မာဘာသာသို့ပြန်ဆိုဗုဒ္ဓဘာသာဓမ္မသတ်သစ်. Mandalay.  
(ウ・フモー・カによる S. C. Lahiri 著, *Principle of Modern Burmese Buddhist Law* のビルマ語訳)
- ဣမြင့်. 1961-1962. “မြန်မာနိုင်ငံနှင့်တရားဥပဒေ,” ရန်ကုန်တက္ကသိုလ်ဥပဒေအသင်းနှစ်ပတ်လည်စာစောင်, pt. i, pp. 17-18.
- ထင်လင်း. 1953-1954. “အိမ်ရှင်ဓမ္မသတ်,” ရန်ကုန်တက္ကသိုလ်ဥပဒေအသင်းနှစ်ပတ်လည်စာစောင်, Rangoon.  
(ラングーン大学法学会年報, *Einshinma Dhammathat*)
- သိန်းလှိုင်. 1970-1971. “ညောင်ရမ်းခေတ်တရားစီရင်ရေး,” ဝိဇ္ဇာနှင့်သိပ္ပံတက္ကသိုလ်မဂ္ဂဇင်း, pp. 265-268.  
(ラングーン文科大学雑誌掲載, テュイン・フライン氏寄稿「ニャウン・ヤン時代の法律」)
- မောင်သောင်း. 1961-1962. “ဓမ္မဝိလာသဓမ္မသတ်,” ရန်ကုန်တက္ကသိုလ်ဥပဒေအသင်းနှစ်ပတ်လည်စာစောင်, pp. 9-11.  
(ラングーン大学法学会年報掲載, マウン・タウンの“Dhammavilasa Dhammathat” に関する寄稿)
- ပါမောက္ခဦးလှအောင်. 1968. “တရားဥပဒေနှင့်စပ်လျဉ်း၍မြန်မာတို့၏အမြင်တရား,” မြန်မာနိုင်ငံသုတေသနဆွေးနွေးပွဲစာတန်းများအကျဉ်း, p. 131.  
(ビルマ研究討論会発表論文要旨集収録のウ・フラ・アウンの「法に関するビルマ人の見方」と題するもの)
- ဦးသိမ်းအောင်. 1955. ဥပဒေရေးရာအဖြာဖြာ. Rangoon.  
(ウ・テュイン・アウン著, 『各種の法律』)
- “မြန်မာဘုရင်များ၏လွှတ်တော်နှင့်ဓမ္မသတ်,” ရန်ကုန်တက္ကသိုလ်ဥပဒေအသင်းနှစ်ပတ်လည်စာစောင်, 1953-1954.

(ラングーン大学法学会年報掲載, 「ビルマ諸王の枢密院とダムマタッ」)

ရန်ကုန်ဝ/သတက္ကသိုလ်ဥပဒေပညာဌာန. 1975.  
မြန်မာဓလေ့ထုံးတမ်းဥပဒေ. Vol. I, II.  
(ラングーン文理科大学 法学部編 『ビルマの慣習法』)

မောင်စိန်ဝင်း. 1968. မနုဓမ္မသတ်ကျမ်း၏ဥပဒေသဘောတရား (အယ် (လ်) အယ် (လ်) တီဥပဒေ ခွဲအတွက်), *ဝိဇ္ဇာနှင့်သိပ္ပံတက္ကသိုလ်၊ ရန်ကုန် ဥပဒေဌာန*.  
(ラングーン文理科大学 法学部 L.L.B. 学士号取得のためのマヌ法典に関する論文)

မောင်စိုးမြင့်. 1968. ဗြိတိသျှကိုလိုနီခေတ်မြန်မာနိုင်ငံ၏တရားစီရင်ရေး (အယ် (လ်) အယ် (လ်) တီဥပဒေခွဲအတွက်).  
(同上. 英領ビルマ時代の法判決に関する論文)

မောင်နှင်းမြင်း. 1968. ကုန်ဘောင်ခေတ်တရားစီရင်ရေး (အယ် (လ်) အယ် (လ်) တီဥပဒေခွဲအတွက်), *ဝိဇ္ဇာနှင့်သိပ္ပံတက္ကသိုလ်၊ ရန်ကုန် ဥပဒေဌာန*.  
(同上. コンバウン王朝時代の法判決に関する論文)

3. 欧 文 (注: *J.B.R.S.* は *Journal of The Burma Research Society* の略称)

Htin Aung, U. 1953. "Customary Law in Burma," *Burma Anniversary Number*, Vol. II, No. 2, Rangoon, pp. 61-67.  
-do-, 1962. *Burmese Law Tales*. London.

Hla Aung, U. 1965. "Some Aspects of Marriage under Burmese Buddhist Law and Malayan Muslim Law," *J.B.R.S.*, Vol. XLVIII, Rangoon, pp. 1-15.  
-do-, 1966. "Code versus Custom in the Development of Burmese Law," *J.B.R.S.*, Vol. 49, pt. ii, Rangoon, pp. 163-172.  
-do-, 1967. "State And Law In Contemporary Socialist Legal Thought," *J.B.R.S.*, Vol. 50, pt. ii, Rangoon, pp. 245-261. (*The Guardian*, Feb. 1968, pp. 31-32 にも掲載されている)  
-do-, 1969. "The Burmese Concept of Law," *J.B.R.S.*, Vol. LIII, pt. ii, pp. 27-41. (*The Guardian*, June 1968, pp. 38-41; July 1968, pp. 12-16 にも掲載されている)

\*Shwe Baw, U. 1955. *The Origin and Developments*

*of Burmese Legal Literature*. London.

Mabel Haynes Bode. Ph. D. 1965. *The Pali Literature of Burma*. Photographic reprint by the Burma Research Society, Rangoon.

\*Kyaw Doon, U. 1877. *Essay On The Sources & Origin Of Buddhist Law*.

\*Arthur Eggar, Sir. 1929. *The Laws of India and Burma*. Calcutta.

\*Forchhammer, Dr. 1882. *His introductory remarks to Jardine's Notes on Buddhist Law III*. Rangoon.  
-do-, 1885. *The Jardine Prize: An Essay*.

Furnivall, J. S. 1939. "The Fashioning of the Leviathan," *J.B.R.S.*, Vol. XXIX, pp. 1-137.  
-do-, 1940. "Manu in Burma: Some Burmese Dhammathats," *J.B.R.S.*, Vol. XXX, pt. ii, Rangoon, pp. 351-370.

M. T. Gywe, U. 1910. (A Preface to) *A Treatise on Buddhist Law*. Vol. II, Mandalay.  
-do-, 1919. *A Conflict of Authority in Buddhist Law*. Vol. I, Mandalay.  
-do-, 1920. -do-, Vol. II, Mandalay.

\*Gledhill, Alan. 1960. "Burmese Law in the Nineteenth Century," *Cahiers d'Histoire Mondiale*. Vol. VII, pp. 172-194.

Hooker, M. B. 1978. *A Concise Legal History of South-East Asia*. Oxford.  
-do-, 1978. "The Indian-Derived Law Texts of Southeast Asia," *The Journal of Asian Studies*, Vol. XXXVII, No. 2, pp. 201-219.

Ba Han, Maung. 1952. *A Legal History of India and Burma*. Rangoon.

Jardine, John. 1882-1883. *Notes on Buddhist Law*. Rangoon.

\*Khetarpal, S. P. 1968. "The Debt of Burmese Jurists to Hindu Law," *Jaipur Law Journal*, Vol. VIII, pp. 6-25.

Maung Maung Kyi, U. 1967. *A New Approach to Law and Life in Burma*.

Lahiri, S. C. 1957. *Principles of Modern Burmese Buddhist Law* (6th ed.). Calcutta.

Lingat, R. 1949. "The Buddhist Manu or the Propagation of Hindu Law in Hinayanist Indo-China, (a translation of a French paper read at the XXIst International Congress of Orientalists, Paris, 1948)," *Annals of the Bhandarkar Oriental Research Institute*, Vol. XXX.

- do-, 1950. "Evolution of the Conception of Law in Burma and Siam (a lecture delivered before the Siam Society on Wednesday, 9th, March, 1949)," *Journal of the Siam Society*, Vol. 38, pp. 4-31.
- \*E Maung, U. 1937. *Burmese Buddhist Law*. Rangoon.
- do-, 1951. *The Expansion of Burmese Law* (being a series of lecture delivered). Rangoon.
- do-, 1951. "Insolvency Jurisdiction in Early Burmese Law," *J.B.R.S.*, Vol. XXXIV, pt. 1, Rangoon, pp. 1-6.
- do-, 1970. *Burmese Buddhist Law*. Rangoon.
- Maung Maung, U. 1963. *Law and Custom in Burma and the Burmese Family*. The Hague.
- do-, 1962. "Lawyers and legal education in Burma," *The Guardian*, Rangoon (reprinted from *The International & Comparative Law Quarterly*, London).
- Mootham, O. H. 1939. *Burmese Buddhist Law*. London.
- May Oung, U. *A Selection of Leading Cases on Buddhist Law with Dissertations*. pt. I, II, III (1914, 1916 and 1919 respectively), Rangoon.
- \*Jules Friend-Pereira. 1891. *Burmese Buddhist Law*. Rangoon.
- \*Thet Pyo, Maung. 1884. *Customary Law of the Chin Tribe*. Text, Translation & Notes. Rangoon.
- Sangermano, Father. 1966. *The Burmese Empire—A Hundred Years Ago* (5th ed.). Translated by William Tondy, D.D., Westminster, London.
- \*Sinha, C. 1973. "Evolution of the Judicial Administration in British Burma 1826-1922," *Journal of the Indian Law Institute*.
- \*Sparks, Major. 1860. *The Burmese Code*. Rangoon.
- Kyin Swi, Maung. 1965. *The Judicial System in the Kingdom of Burma*.
- do-, 1966. "The Origin and Development of the Dhammathats," *J.B.R.S.*, Vol. 49, pt. 2, Rangoon, pp. 173-205.
- Aung Than Tun, U. 1961. "The Burmese Customary Law," *The Guardian*, Vol. VIII, No. 7, pp. 14-16.
- do-, 1967. "The Chin Customary Law," *The Guardian*, Vol. XIV, No. 4, Rangoon, pp. 33-34.
- do-, 1972. "Moral Principles in Burmese Law," *The Guardian*.
- Thayer, P. W. 1953. "Customary Law in Burma," Burma Anniversary Number.
- Chan Toon, U. 1894. *The Principles of Buddhist Law*. Rangoon.
- do-, *Leading Cases*. Vol. I (1899), Vol. II (1902), Rangoon.
- Shway Yoe. 1963. *The Burman—His Life and Notions* (Chapter LV, Judicial Administration). New York.
- \*Fuehrer, Rev. Dr. A. 1883. "Manusaradhammasattham, the only one existing Buddhist Law Book, Compared with the Brahmanical Manavadharmasatram," *Journal Bombay Branch of the Royal Asiatic Society*, Vol. XV.
- List of Microfilms Deposited in The Center for East Asian Cultural Studies*. 1976. Part 8 (Burma), Tokyo.

〔附表 1〕 (1) ラングーン大学中央図書館所蔵ダムマタツ関係貝葉書リスト

蔵書番号	編者	名 称	写本年 (ビルマ暦)
၆၁ (61)	လက်ဝဲသုန္ဒရ Letwèthōndara	ဝိနိစ္ဆယပကာသနိဓမ္မသတ်လင်္ကာ Vinicchayapakāsanī Dhammathat Laṅka	၁၁၃၉ (1139)
၆၈ (68)	မြင်ကွန်းရှင်ဝိလာသ Myingunshin vilasa	မနုပျို Manupyō	၁၁၃၀ (1130)
၁၄၄ (144)	ပေါက်ထွံမင်းပျံချီ Paukkan min pyanchi	ဓမ္မသတ်ကွန်ခြာဖြတ်ထုံးစာ Dhammathat kungya Phyathtoon	၁၂၃၁ (1231)
၂၅၆ (256)	လက်ဝဲသုန္ဒရ Letwèthōndara	မနုရင်းလင်္ကာ Manuyin Laṅka	၁၁၇၆ (1176)
၂၇၀ (270)	လက်ဝဲသုန္ဒရ Letwèthōndara	ဝိနိစ္ဆယပကာသနိဓမ္မသတ်လင်္ကာ Vinicchayapakāsanī Dhammathat Laṅka	၁၂၃၀ (1230)
၂၇၁ (271)	ဝဏ္ဏဓမ္မကျော်ထင် Vaṅṅa Dhamma Kyaw Htin	မနုဝဏ္ဏနာဓမ္မသတ်ပါဠိနိဿယ Manuvaṅṅana Dhammathat Pali Nisha	၁၂၃၀ (1230)
၂၈၇ (287)	ရှင်ဗုဒ္ဓဇောသ Shin Buddhagosa	မနုဓမ္မသတ်လင်္ကာ Manu Dhammathat Laṅka	၁၂၂၇ (1227)
၂၈၈ (288)	တွင်းသင်းတိုက်ဝန် Twinthintaik Wun	တွင်းသင်းဓမ္မသတ်လင်္ကာ Twinthin Dhammathat Laṅka	၁၂၃၂ (1232)
၅၁၆ (516)	ပုဂံဝန်ထောက်ဦးတင် Pagan Wundauk U Tin	အိမ်ဦးဓမ္မသတ်လင်္ကာ Einoo Dhammathat Laṅka	၁၂၄၂ (1242)
၅၂၀ (520)		မနုရင်းဓမ္မသတ်လင်္ကာ Manuyin Dhāmmathat Laṅka	၁၂၂၃ (1223)
၅၂၁ (521)	ကိုင်းရွာစားမနုရာဇာ Kaingyazā manuyaza	မနုသာရဓမ္မသတ်ကျမ်းဟောင်း Manusāra Dhammathat Kyamm Haung	၁၂၃၉ (1239)
၅၂၂ (522)	ယင်းတော်မြို့စား Yinndaw myozā	မနုသာရဓမ္မသတ်ကျမ်းသစ် Manusāra Dhammathat Kyamm Thit	
၅၂၃ (523)	ဝဏ္ဏဓမ္မကျော်ထင် Vaṅṅa Dhamma Kyaw Htin	မနုသာရရွှေမျဉ်းဓမ္မသတ် Manusāra Shwe Myin Dhammathat	၁၂၄၅ (1245)
၅၂၄ (524)	ဇေယျပျံချီ Zeyapyanchi	ပကိဏ္ဏကဝိနိစ္ဆယဓမ္မသတ်မူ (၁) Pakiṅṅaka Vinicchaya Dhammathat Mu (1)	၁၂၃၀ (1230)
၅၂၅ (525)	// //	// (၂) // (၂)	၁၂၃၉ (1239)
၅၂၆ (526)	ဦးရွှေကြာ U Shwe Kya	ဓမ္မသတ်ဖြတ်ထုံးပေါင်းချုပ် Dhammathat Phyathtoon Paung gyok	၁၂၄၃ (1243)

蔵書番号	編者	名 称	写本年 (ビルマ暦)
၅၂၀ (528)	မဟာဇေယျသုဝဏ္ဏဓမ္မကျော်ထင် Mahazeyatsu Vanṇa Dhamma Kyaw Htin	မနုဝဏ္ဏနာဓမ္မသတ် Manuvaṇṇana Dhammathat	၁၂၃၉ 1239)
၅၂၉ (529)	ကိုင်းစားမနုရာဇာ Kaingza Manuyaza	လျှောက်ထုံးမဟာရာဇသတ်ကြီးမူ (၁) Hlokhtoon Mahayazathatkyi Mu (1)	၁၂၃၉ 1239)
(	//	// (၂)	၁၂၄၄ 1244)
၆၆၇ (667)		ဓမ္မသတ်ခေါင်းစဉ် Dhammathat Khaungzin	)
၁၁၂၃ (1123)		ဝိနိစ္ဆယရာသီဓမ္မသတ်စကားပြေ Vinicchayarasi Dhammathat zaga: byè	၁၁၈၀ 1188)
၁၇၃၅ (1735)	ကင်းဝန်မင်းကြီး Kinwun Mingyi	အဋ္ဌသံဒိင်ဓမ္မသတ် Aṭṭasankhepa Dhammathat	၁၂၃၉ 1239)
၁၈၂၉ (1829)		မနောသာရဖြတ်ထုံး Manosāra Phyathtoon	၁၂၃၉ 1239)
၁၈၄၂ (1842)		ရွှေနားတော်သွင်းမနုဓမ္မသတ် Shwenā: dhaw Thwinn Manu Dhammathat	၁၂၄၀ 1240)
၁၈၆၃ (1863)		ကိုင်းစားမနုရာဇာလျှောက်ထုံး Khaingzā Manuyaza Phyathtoon	၁၁၃၆ 1136)
၁၈၆၄ (1864)	မင်းကြီးမဟာရာဇသကြီး Mingyi Mahayazathingyan	အဋ္ဌရာသီဓမ္မသတ်ပျိုလင်္ကာ Aṭṭarasi Dhammathat pyö	၁၂၄၀ 1248)
၁၈၇၂ (1872)		ဝိနိစ္ဆယပကိဏ္ဍကနိသျှ Vinicchaya Pakiṇṇaka Nisha	)
၁၈၄၇ (1847)		လက်ဝဲနော်ရထာလျှောက်ထုံး Letwè nawyahta Hlokhtoon	)
၁၉၂၇ (1927)		ဓမ္မသတ်လင်္ကာ Dhammathat Lanka	)
၁၉၉၆ (1996)		ဓမ္မဝိလာသဓမ္မသတ် Dhammavilasa Dhammathat	)
၂၀၁၂ (2012)	ကင်းဝန်မင်းကြီး Kinwun Mingyi	အဋ္ဌသံဒိင်ဓမ္မသတ် Aṭṭasankhepa Dhammathat	၁၂၃၈ 1238)
၂၂၂၅ (2225)		ဝိနိစ္ဆယဓမ္မသတ်ကွန်ချာအချုပ် Vinicchaya Dhammathat Kungya achok	၁၁၆၁ 1161)



奥平：ビルマの「ダムマタツ」(慣習法典) について

蔵書番号	編者	名 称	写本年 (ビルマ暦)
၂၃၁၉ (2319)	ဝဏ္ဏဓမ္မကျော်ထင် Vaṅṅa Dhamma Kyaw Htin	မနုသာရဓမ္မသတ်ရွှေမျဉ်းပါဠိနိဿယ Manusāra Dhammathat Shwe Myin Pali Nisāya	၁၁၅၄ (1154)
၂၃၃၆ (2336)	တွင်းသင်းမင်းကြီး Twinthin Mingyi	မနုဓမ္မသတ်လင်္ကာ Manu Dhammathat Lanka	၁၂၄၅ (1245)
၂၅၆၃ (2563)		ဒုတ္တပေါင်ဖြတ်ထုံး Duttaubaung Phyathtoon	)
၂၇၈၀ (2780)	ကိုင်းစားနှင့်တောင်ဖိလာ Kaingza hnit Thaung hpila	ဓမ္မသတ်ရွှေမျဉ်း Dhammathat Shwe Myin	၁၂၁၀ (1210)
၃၀၄၇ (3047)		ဓမ္မသတ်ဖြတ်ထုံး Dhammathat Phyathtoon	၁၂၀၃ (1203)
၃၀၆၀ (3060)		မနုရင်းဓမ္မသတ် Manuyin Dhammathat	၁၂၁၁ (1211)
၄၀၉၄ (3094)		ဆင်ဖြူရှင်မင်းတရားဖြတ်ထုံး Shinbyushin Mintayā Phyathtoon	၁၂၂၈ (1228)
၃၁၀၉ (3109)		ဓမ္မသတ်အတိုကောက် Dhammathat Atoegauk	၁၂၃၀ (1238)
၄၁၄၀ (3140)		ဓမ္မသတ်ကောက်နှုတ်ချက် Dhammathat Kaukhnokchet	)
၃၁၅၀ (3150)		// //	)
၃၁၉၁ (3191)		မနုဓမ္မသတ်ကောက်ချက် Manu Dhammathat Kaukchet	)
၃၁၉၄ (3194)		အိမ်တွင်းမှုဓမ္မသတ်လင်္ကာ Eindwinhmu Dhammathat Lanka	၁၂၄၉ (1249)
၃၂၀၃ (3283)		မနုရင်းကျမ်းထွက်စုန်ရေချစာတန်း (ဟံသာဝတီဆင်ဖြူရှင်လက်ထက်ရှင်ဗုဒ္ဓ ဆောသပြန်ဆိုသည်) Manuyin Kyam: htwet sonyècha sadan (Hanthawaddy Shinbyushin lethtet Shin buddhagosa pyan hso thi)	)
၄၆၄၅ (4645)		မနုရာဇာဖြတ်ထုံး Manu Yaza Phyathtoon	၁၂၂၄ (1224)
၄၆၅၇ (4657)		ဓမ္မသတ်ဖြတ်ထုံးများ Dhammathat Phyathtoon myā	)

蔵書番号	編者	名 称	写本年 (ビルマ暦)
၄၇၄၉ (4749)	ဝဏ္ဏဓမ္မကျော်ထင် Vaṅṅa Dhamma Kyaw Htin	ရွှေမျဉ်းမနုဿာရ (မှ) ပိုင်း Shwe Myin Manusāra (Du) Paing	၁၂၀၆ 1216)
၅၁၃ (513)		ဓမ္မသတ်ကိုးစောင်အချုပ်ကွန်ချာ Dhammathat Kosaung kyop Kungya	၁၂၃၆ 1236)
၅၁၄ (514)		ဓမ္မသတ်ကွန်ချာကျမ်း Dhammathat Kungya Kyam:	၁၂၆၄ 1264)
၅၁၅ (515)	ပုဂံဝန်ထောက်ဦးတင် Pagan Wundauk U Tin	အနုရာသီဓမ္မသတ်လင်္ကာ Aṅṅarasi Dhammathat Laṅka	၁၂၄၆ 1246)
၅၃၁ (531)	မင်းကြီးမဟာစည်သူ Mingyi Maha Shithu	မနုဝဏ္ဏနာဓမ္မသတ်လင်္ကာ Manu Vaṅṅana Dhammathat Laṅka	၁၂၃၆ 1236)
၅၃၂ (532)	ကင်းဝန်မင်းကြီး Kinwun Mingyi	အနုသံခိပ်လင်္ကာ Aṅṅasankhepa Laṅka	၁၂၄၄ 1244)
၅၆၉ (569)	// //	အနုသံခိပ်ဓမ္မသတ်လင်္ကာ Aṅṅasankhepa Dhammathat Laṅka	၁၂၄၅ 1245)
၁၁၂၀ (1120)		မနုဝဏ္ဏနာဓမ္မသတ်နိဿယ Manu Vaṅṅana Dhammathat Nishā	)
၁၁၃၉ (1139)	မန်ကျီးတုံလက်ဝဲသူနွရ Mankytton Letwèthōndara	ဝိနိစ္ဆယပကာသနီဓမ္မသတ်တင်္ကာ Vinicchayapakāsani Dhammathat Laṅka	၁၂၃၉ 1239)
၁၂၃၄ (1234)		ဝိနိစ္ဆယပကာသနီနိဿယ (ပ)(တ) Vinicchayapakāsani Nishā (Pa) (Ta)	၁၂၂၅ 1225)
၁၆၁၃ (1613)		မနုဓမ္မသတ် Manu Dhammathat	)
၁၇၃၅ (1735)	ကင်းဝန်မင်းကြီး Kinwun Mingyi	အနုသံခိပ်ဓမ္မသတ် Aṅṅasankhepa Dhammathat	)
၁၈၉၉ (1899)	ဝဏ္ဏဓမ္မကျော်ထင် Vaṅṅa Dhamma Kyaw Htin	မနုဝဏ္ဏနာ (မနုကျမ်း) ၂၅၂ချပ် Manu Vaṅṅana (Manu Kyam:) 252 Chat	၁၂၃၀ 1230)
၁၉၀၃ (1983)		ရေစကြိုခုံတော်ဖြတ်ထုံး Yesagyō Kondaw Phyattoon	)
၂၅၃၆ (2536)		မနုရာဇာဖြတ်ထုံး Manu Yaza Phyattoon	)
၂၉၉၆ (2996)		မနုဝဏ္ဏနာဓမ္မသတ် (ပ) တွဲ Manu Vaṅṅana Dhammathat (P) dwè	၁၂၂၃ 1223)

奥平：ビルマの「ダムマタッ」(慣習法典) について

蔵書番号	編者	名 称	写本年 (ビルマ暦)
၃၀၇၃ (3073)		မနုဝဏ္ဏနာမဓမ္မသတ် (ဒု) တွဲ Manu Vaṇṇanā Dhammathat (D) dwè	)
၃၀၉၉ (3099)		ဓမ္မသတ်တွက်နှင့်တရားမစီရင်ထုံး Dhammathat twet hnit Tayāma Siyinhtoon	)

(2) ラングーン国立図書館所蔵ダムマタッ関係員葉書リスト

番 号	ダ ム マ タ ャ の 名 称	蔵書番号
၁ (1)	ကိုးစောင်ချုပ်ဓမ္မသတ် Kozaunggyop Dhammathat	၄၂ (42)
၂ (2)	ကိုင်းစားမနုရာဇာဓမ္မသတ် Kaingza Manuyaza Dhammathat	၁၆၉၀ (1698)
၃ (3)	ကိုင်းစားရွှေမျဉ်း (၆တွဲ) Kaingza Shwe Myin	၂၀၀၅ (2085)
၄ (4)	ကျက်ရိုးထိုးကျမ်း Kyet yō Htoo Kyam:	၂၁၀၀ (2107)
၅ (5)	ကျမ်းနက်ဓမ္မသတ် Kyam: Net Dhammathat	၄၃ (43)
၆ (6)	ခြင်္သေ့အဖြေခေင်္ဂါလက်ဝဲနော်ရထာလျှောက်ထုံး Chinthè Apye hkaw Letwè Nawyahta Hlokhtoon	၁၃၅၇ (1357)
၇ (7)	ဂန္ဓီဓမ္မသတ် Gandi Dhammathat	၂၀၀၂ (2082)
၈ (8)	ဆုံထားမနုဓမ္မသတ် Sōndamanu Dhammathat	၂၀၇၀ (2078)
၉ (9)	တရားမတရားသူကြီးလျှောက်ထုံး Tayama Taya Thugyi Hlokhtoon	၁၃၅၃ (1353)
၁၀ (10)	တိလောက်ကာတုလျူချီမနုဓမ္မသတ်နိဿယ (၁၅) တွဲ Tilawkatulyāchi Manu Dhammathat Nishāthit (15) dwè	၂၀၄၄ (2044)
၁၁ (11)	ဓမ္မဝိလာသဓမ္မသတ် Dhammavilāsa Dhammathat	၁၄၉၁ (1491)
၁၂ (12)	ဓမ္မဝိလာသမနုမနောဓမ္မသတ်သမိုင်း Dhammavilāsa Manumāno Dhammathat Thamaing	၁၄၉၁ (1491)

番号	ダ ム マ タ ッ の 名 称	蔵書番号
၁၃ (13)	ဓမ္မသတ်ကောက်ပုံ Dhammathat Kaukpon	၁၆၈၉ 1689)
၁၄ (14)	ဓမ္မသတ်ကွန်ချာ (ပ) Dhammathat Kungya (P)	၂၂၇၄ 2274)
၁၅ (15)	// (တ) // (T)	၂၂၇၆ 2276)
၁၆ (16)	// (စ) // (S)	၂၂၇၅ 2275)
၁၇ (17)	ဓမ္မသတ်ကွန်ချာ Dhammathat Kungya	၂၀၅၆ 2056)
၁၈ (18)	ဓမ္မသတ်ချုပ်လင်္ကာ Dhammathatgyop Lan̄ka	၂၂၀၅ 2285)
၁၉ (19)	ဓမ္မသတ်နိဿယ Dhammathat Nisha	၁၆၉၂ 1692)
၂၀ (20)	ဓမ္မသတ်မှတ်စု Dhammathat hmatsu	၂၀၅၇ 2057)
၂၁ (21)	// //	၂၀၅၈ 2058)
၂၂ (22)	// //	၂၀၅၉ 2059)
၂၃ (23)	ဓမ္မသတ်အတိုကောက် Dhammathat Atoegauk	၃ 3)
၂၄ (24)	// //	၂၀၈၄ 2084)
၂၅ (25)	ပကိဏ္ဍကကျော်ဓမ္မသတ်လင်္ကာ Pakiṇṇa ka kyaw Dhammathat Lan̄ka	၁၆၇၆ 1676)
၂၆ (26)	ပြူမင်းဓမ္မသတ် Pyumin Dhammathat	၂၀၇၉ 2079)
၂၇ (27)	ဘယကျော်သူဖြတ်ထုံး Baya kyaw thu Phyathtoon	၂၀၄၉ 2049)
၂၈ (28)	မနုကျယ်ဓမ္မသတ် Manu Kyay Dhammathat	၆ 6)

奥平：ビルマの「ダムマタツ」(慣習法典) について

番号	ダムマタツの名称	蔵書番号
၂၉ (29)	မနုကြက်ရိုးဓမ္မသတ် Manu Kyetyō Dhammathat	၁၇၀၃ 1703)
၃၀ (30)	မနုစိတ္တရဝိနိစ္ဆယ (၇) တွဲ Manu seittarā Vinicchaya (7) twè	၂၀၄၃ 2043)
၃၁ (31)	// // // //	၂၀၅၅ 2055)
၃၂ (32)	မနုဓမ္မသတ်စာကိုယ်ပါဠိ Manu Dhammathatsako Pali	၂၀၀၀ 2080)
၃၃ (33)	မနုဓမ္မသတ်နိဿယ (၁၅) တွဲ Manu Dhammathat Nishāthit (15) dwè	၁၆၉၀ 1698)
၃၄ (34)	မနုဖြတ်ထုံးလင်္ကာ Manu Phyathtoon Laṅka	၁၇၀၇ 1707)
၃၅ (35)	မနု၊မနုသာရ၊မနော၊ရွှေမျဉ်းခွဲပုံ Manu, Manusāra, Mano, Shwe Myin kwèbon	၁၆၉၄ 1694)
၃၆ (36)	မနုရာဇဖြတ်ထုံးခေါ်မဟာရာဇသတ် Manuyaza Phyathtoon hkaw Mahayazathat	၁၆၆၂ 1662)
၃၇ (37)	မနုရင်းဓမ္မသတ်ကျော် Manuyin Dhammathat Kyaw	၂၀၇၀ 2070)
၃၈ (38)	မနုရင်းဓမ္မသတ်နိဿယဆုံးထားမှု Manuyin Dhammathat Nishā Hsoonhtamu	၂၀၀၁ 2081)
၃၉ (39)	မနုရင်းဓမ္မသတ်လင်္ကာ Manuyin Dhammathat Laṅka	၂ 2)
၄၀ (40)	မနုရင်းအကျယ် Manuyin Akyay	၁၇၂၀ 1702)
၄၁ (41)	// (၁၀) တွဲ // (10) dwè	၁၆၉၉ 1699)
၄၂ (42)	မနုရွှေမျဉ်းနိဿယ Manu Shwe Myin Nishā	၂၀၆၂ 2062)
၄၃ (43)	မနုဝဏ္ဏနာဓမ္မသတ်ရွှေမျဉ်းနိဿယ Manu Vaṅṅana Dhammathat Shwe Myin Nishā	၁၆၇၂ 1672)
၄၄ (44)	မနုဝဏ္ဏနာနိဿယ (၅) တွဲ Manu wuṅṅa Nishā (5) dwè	၂၀၄၇ 2047)

番号	ダ ム マ タ ッ の 名 称	蔵書番号
၄၅ (45)	မနုဝဏ္ဏနာနိဿယ (၁၀) တွဲ Manu wuṇṇa Nisha (10) dwè	၁၇၀၁ 1701)
၄၆ (46)	မနုဝဏ္ဏနာလင်္ကာ Manuvaṇṇanaṅka	၂၂၀၄ 2284)
၄၇ (47)	မနုသာရဓမ္မသတ် Manusāra Dhammathat	၂၂၇၇ 2277)
၄၈ (48)	မနုသာရနိဿယ Manusāra Nisha	၁၆၆၄ 1664)
၄၉ (49)	မနုသာရဖြတ်ထုံး Manusāra Phyathtoon	၁၇၀၈ 1708)
၅၀ (50)	မနုသာရရွှေမျဉ်းဓမ္မသတ်ကျမ်းသစ်ပါဠိ-နိဿယ (၁၀) တွဲ Manusāra Shwe Myin Dhammathat Kyam: thit Pali-Nisha (10) dwè	၂၀၄၆ 2046)
၅၁ (51)	မနောသာရဓမ္မသတ် Manosāra Dhammathat	၂၀၅၁ 2051)
၅၂ (52)	မာနုသိကဓမ္မသတ် Manusika Dhammathat	၂၀၇၃ 2073)
၅၃ (53)	ရာဇဗလဓမ္မသတ် Yazabala Dhammathat	၂၀၈၆ 2086)
၅၄ (54)	ရွှေမျဉ်းဓမ္မသတ်နိဿယ (၉တွဲ) Swemyin Dhammathat Nisha (9) dwè	၁၆၇၀ 1670)
၅၅ (55)	ဝါဂရူမင်းဓမ္မသတ်နိဿယ Wagarumin Dhammathat Nisha	၁၆၉၃ 1693)
၅၆ (56)	// လင်္ကာ // Laṅka	? 7)
၅၇ (57)	ဝိနိစ္ဆယပကာသနီ (၆) တွဲ Vinnicchaya Pakāsani (6) twè	၂၀၅၃ 2053)
၅၈ (58)	ဝိနိစ္ဆယဘေဒကဓမ္မသတ် Vinnicchaya Bedaka Dhammathat	၂၀ 20)
၅၉ (59)	အဋ္ဌသံခေပဝဏ္ဏနာ Aṭṭasankhepavaṇṇana	၂၄၅၄ 2454)
၆၀ (60)	အဋ္ဌသံခိဗ္ဗဓမ္မသတ်လင်္ကာ Aṭṭasankhepa Dhammathat Laṅka	၁၆၇၀ 1678)

奥平：ビルマの「ダムマタツ」(慣習法典) について

番号	ダムマタツの名称	蔵書番号
60 (61)	အဇ္ဈရာသီဓမ္မသတ်လင်္ကာ Attarasi Dhammathat Lanka	၁၆၇၉ 1679)
၆၂ (62)	အမ္ဘေပုံဓမ္မသတ် Amwebon Dhammathat	၂၀၆၈ 2068)
၆၃ (63)	အမ္ဘေ ၄၅-ရပ်-ဓမ္မသတ်လင်္ကာ Amwe 45-Yat-Dhammathat Lanka	၂၄၀၀ 2401)
၅၄ (64)	အမ္ဘေတေရား-ရ-ပီး Amwetayā-7-pā	၂၂၀၂ 2282)
၆၅ (65)	ဦးတောင်ရိပ်ဓမ္မသတ် (ဆဌမနှင့်အဌမတွဲ) U Taungyeik Dhammathat (hsatṃa hnit Aṭṃa dwè)	၂၀၇၀ 2071)
၆၆ (66)	ဦးတောင်ရိပ်အမ္ဘေခန်း U Taungyeik Amwe gann	၂၀၇၂ 2072)

〔付表 2〕 ダムマタツ研究略史年表

西暦年	内 容
1795	英国人使節，サイムズがビルマのダムマタツとヒンドゥー・マヌ法典の類似性を指摘 英国人使節コックス，アルメニア人に対し，Sir William Jones の <i>Institute of Manu</i> のビルマ語訳依頼
1796	Thiri Mahā Zeyathū, <i>Kawi Lekkhana Dipani</i> 編纂
1800	イタリア人サンジェルマノ，貝葉書のダムマタツをラテン語に初めて翻訳
1847	リチャードソン博士，マヌヂェ・ダムマタツを英訳刊行
1852	インド省のロスト博士，ダムマタツの一つを西欧人学者に紹介し，ヒンドゥー法との類似性を指摘
1860	スパークス，英国人裁判官のガイドブックとして，ダムマタツと既存の慣習から集めた『基本法規概要』( <i>The Burmese Code</i> ) を出版
1870	<i>Kaingza Manuyayazathat</i> と呼ばれる <i>Mahayazathat</i> の刊行
1878-79	ホーレイス・ブラウン（ペグー管区弁務官）監修，ウ・テッ・トオ副郡長の編集で <i>Manuyin, Manu Vanṇana, Manusāra Shwe Myin</i> および <i>Vinicchaya Pakāsanī</i> を刊行
1882	<i>Aṭṭsankhepa Vanṇana Dhammathat</i> , キンウン・ミンヂーが刊行 下ビルマの法務長官ジャーディン，ラングーン・カレッジのパーリ語教授フォーシャーマー博士の協力を得て <i>Notes on Buddhist Law</i> を著わす 古来の諸々のダムマタツが，ジャーディンの時代以降注目を浴び，漸次刊行される
1885	“Sources and Development of Burmese Buddhist Law” を発表したフォーシャーマー博士に対し <i>The Jardine Prize: An Essay</i> として賞金1,000ルピーが贈られる
1888	ミンドン王時代の王宮図書館司書でのちのマイン・カイン侯，Mingyi Mahā Thiri Zeyathū, <i>Piṭakat Daw Thamaing</i> を編纂
1892	<i>King Wagaru's Manu Dhammasattham</i> のテキスト，英訳および <i>Notes</i> の刊行 W.D.C. Ireland, သမုတုဒ္ဓိဓမ္မဒနိဓမ္မသတ် と呼ばれる မြန်မာတရားလမ်းဓမ္မသတ်ချုပ် を刊行

西暦年	内	容
1893-95	上ビルマの法務長官バージスの求めにより、キンウン・ミンヂー監修で、 စောင်တွဲဓမ္မသတ်ကြီး 編纂	သုံးဆယ့်ခြောက်
1894	U Chan Toon, <i>Manusāra Shwe Myin</i> の重要部分を英訳, 著書 <i>The Principles of Buddhist Law</i> に収録	
1897	キンウン・ミンヂー監修により,	သုံးဆယ့်ခြောက်စောင်တွဲဓမ္မသတ်ကြီး 編纂される
1899	キンウン・ミンヂー監修により,	သုံးဆယ့်လေးစောင်တွဲဓမ္မသတ်ကြီး 編纂される
1905	4人のビルマ人学者が Mingyi Mahā Thiri Zeyathū の <i>Piṭakat Thōnboon Sadan</i> を Thudhammawaddy Press から刊行	
1909	Mabel Haynes Bode 女史, <i>The Pali Literature of Burma</i> を著わし, その中でフォーシャーマー博士のダムマタツに関する見解を披露	
1910	M.T. Gywe, <i>A Treatise on Buddhist Law</i> (Vol. II) を著わす	
1914	U May Oung, <i>A Selection of Leading Cases on Buddhist Law with Dissertations</i> を著わす	
1919-20	M.T. Gywe, <i>A Conflict of Authority in Buddhist Law</i> (Vol. I, II) を著わす	
1925	G. E. Harvey, <i>History of Burma</i> を著わし, その中で, フォーシャーマー博士のダムマタツに関する見解を紹介	
	S.C. Lahiri, <i>Principles of Modern Burmese Buddhist Law</i> を著わす	
1927	Thiri Mahā Zeyathū の <i>Kawi Lekkhana Dipani</i> 刊行	
1929	Arthur Eggar, <i>The Laws of India and Burma</i> を著わす	
1937	U E Maung, <i>Burmese Buddhist Law</i> を著わす	
1939	O.H. Mootham, <i>Burmese Buddhist Law</i> を著わす	
1940	ファーニヴァル, “Manu in Burma” を著わし, フォーシャーマー理論を検討	
1949	R. Lingat が, ビルマとタイのダムマタツに関する Evolution of the Conception of Law in Burma and Siam と題する講演を行う	
1951	U E Maung が行なった一連の講義の内容を <i>The Expansion of Burmese Law</i> として収録 また, “Insolvency Jurisdiction in Early Burmese Law” なる小論発表	
1952	Maung Ba Han, <i>A Legal History of India and Burma</i> を著わす	
1955	U Mya Sein, မြန်မာ့ဗုဒ္ဓဘာသာတရားဥပဒေ を著わす	
1961	U Aung Than Tun, “The Burmese Customary Law” なる小論発表	
1962	U Htin Aung, <i>Burmese Law Tales</i> を著わす	
1963	Maung Maung 博士, <i>Law and Custom in Burma and the Burmese Family</i> を著わす	
1966	U Hla Aung, “Code versus Custom in the Development of Burmese Law” なる論文を発表 Maung Kyin Swi が論文 “The Origin and Development of the Dhammathats” を発表	
1968	U Mya Sein, 先に著わした မြန်မာ့ဗုဒ္ဓဘာသာတရားဥပဒေ を第4版から မြန်မာဓမ္မထုံးတမ်းဥပဒေ と改名	
	U Aung Than Tun, “မြန်မာမင်းများတရားစီရင်ရေး” を著わす	
1970	U E Maung, <i>Burmese Buddhist Law</i> を著わす	